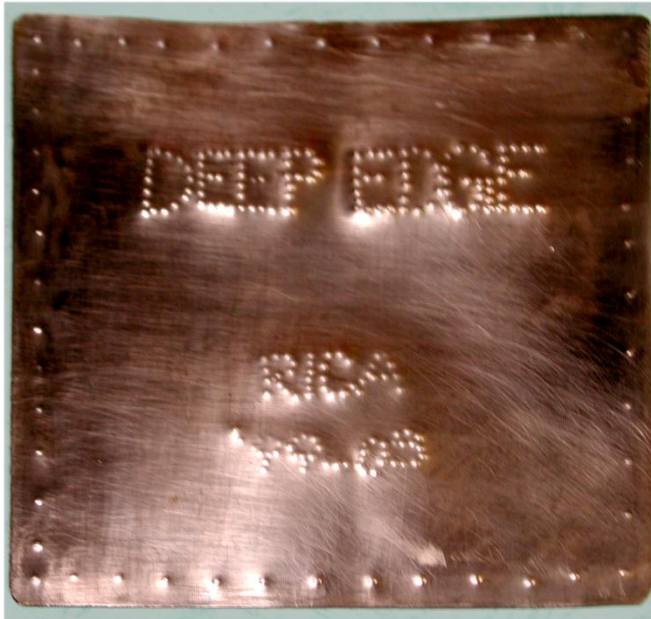


DEEP EDGE



RICA OJARA
'99-03

はじめに

センパイ：『何で画家なんだよ？』

アタシ：『イヤー、一発当てようと思って…。』

センパイ：『だからってさ、画家じゃなくても、イーだろうよ。他にも、できることあるだろ。第一、絵なんて、描いていたのかよ？』

アタシ：『そうなんですよねえ。まだ、絵が下手で…。でもさ、金は、働けば稼げることは解ったし、家も買ったし、借金もないし、まだ、少し手持ちがあるから、やりたいことに、チャレンジしようかなーと思って。アタシ、パソコンができるから、就職しようと思えば、いつでもできますし、絵の才能は、あると思うんですよね。うん』

人生一回きり、昨日には戻れない。

二千四年 一月 おじやら りか

*** もくじ ***

はじめに

一日体験

バリ以前

行ったり来たり

バリ島での制作

バリ島での制作(黒の時代)

ブルーインクの時代

黒の時代再び

自分でカットした銅板の時代

帰国後の制作

終わりに

電子画集について

一日体験

『ハイ、それじゃ、銅板に、直接絵を描いてゆきますからね。まず、絵を転写しまーす。』

大柄なセンセイは、かなり軽いノリで、銅版画の技法の説明を始める。

『え？腐食液を使う方法じゃないのかあ。』

内心ガツカリしながら、指示に従って、銅板に線を描いてゆく。

そうだよなあ。一日体験で、ちゃんとした銅版画が、習得できるワケがない。

キモチを切り替えて、描画に集中する。

銅板というのは、思いのほか硬くて、深い線を手で刻むのは、疲れる作業だった。

『銅版画、始めてみようかなと思つてさ。

ペンで描いた出来のいいやつなんかをさ、大量に作れば、売れるかも。』

などという、安易な野心が、私を動かした。

人間を動かす動機の源は、所詮この程度。

年賀状を、木版画で作っていたアタシは、桜などの固い木材で、版画を作るようになっていった。

『桜の木はさあ、硬くてね、もう、疲れちゃつて。

もつと、楽な方法ないんつかねえ。』

たいして銅版画を見たことも無かったのに、銅版画を選択したのは、高校の美術の時間に、銅版画の作品で『十』を頂いたという、奇跡的な実績に支えられていた。

版画作品の成績だけはいつもヨカッタという、甘い思い出。

このとき、何故、リトグラフを選ばなかったのか？
思い返せば、後悔しないわけでもない。

ロートレックの複製画のポスターは、学生時代からずっと、自室に飾られていた。

黒い猫を抱いた赤いドレスの女性は、毎日アタシのことを見下ろしていた。

リトグラフを毎日見ていたにもかかわらず、銅版画を選んだなんて、どうかしているぜ。

といっても、この当時は、大して絵も描けなかったので、リトでは、身分不相応だったとも思う。銅版画もできて、木版も出来た上で、平版に流れるべきだろう。

リトグラフは、やってみたかったのだが、本などを読んでも、どうして印刷できるのかが、全く理解できなかったというのものもある。

『銅版画は、描くように線が作れる』というのを、
経験済みなのだ。

とりあえず、好感触の銅版画をやってみよう。

大学が御茶ノ水にあったこともあり、勤め人にな
って自称『日曜画家』だったアタシは、御茶ノ水の
画材店に、よく足を運んだ。油絵の具を一つ買うと、
版画コーナーにも必ず立ち寄り、エッチングのプレ
ス機の前で、長いこと立ち止っていた。

『一番小さいのでも7万円もする。』

何でも三日坊主が特徴のアタシの人生だ。こんな
の買って、家では全く作らないなんてことになった
ら、邪魔なだけだしなあ。

自宅でも、継続して作れるモノなのかどうかを、
まず、見極めたい。

『そのためにも、是非、一度、チャレンジしてみなくっちゃ。』



ガリガリと銅板に

傷をつけて、

線を描画する。

0000-1

薔薇と女(習作)

ドライポイント (ニードル・ビュラン)

1997年制作

小林先生のお教室にて一日体験に参加。

w16×h20cm

アタシ：『もう少し、線を太くしたいんですけど。』

先生：『そんじゃね、ビュランを使ってみようか。こうやってね、筋をつけてね。ウン。そうそう。』

アタシ：『げっ、はみ出た……。センセイ、傷はどうやって消すんですかあ……。』

先生：『うーん、こんなに強い溝をつくっちゃうとね、消すのは難しいんだよねー。こんなに深い傷はねー。失敗しないように描こうね。』

こんな感じで、一日体験の版画は、あっという間に完成してしまおう。

この頃から、作品を作るのは早かった。

アタシ：『もう一枚作ってもいいですか？』

センセイ：『あと二時間か。ま、いいか。そんじや、もう一枚あげるね。』

なんとも軽いノリのお教室で、
カルチャースクールというのは、
楽しいものだというのを知る。

当時サラリーマンだったアタシが行く講習会とい
えば、『税務講座』『意思決定』『問題解決』『リスク
マネジメント』『自己啓発』『創造力開発』『パソコ
ン基礎知識』などなど、頭でっかちの講習ばかり。
何の疑問も持たずに、よくもまあ、あんなにつまら
ない講習会に、参加したもんだよなあ。（会社の金だ
けど）



0000-2 猫(習作)
ドライポイント（ニードル・ビュラン）1997年制作
小林先生のお教室にて一日体験に参加。

w10×h16cm

残りのもう一枚も時間内に完成し、アタシはまた、サラリーマンに戻った。

今では、そんなに金を掛けて育てた社員も、半分以上が早期退職を選択させられて、会社は、吸収合併に次ぐ合併で、跡形も無い。

不景気というのは、恐ろしい。

アタシは、早期退職の金で家を買ひ、残りの金がなくなるまで、画家になる修行をすることに決めたのだった。

このお教室に参加した時には、考えも及ばないことであつた。

バリ以前（紫の時代）

会社を辞めようなどと考えていたときに、山本容子さんという銅版画家の、『銅版画で遊ぼう』という学習番組が放送された。

ビデオに録画して、編集して、家事や掃除をしなから、繰り返し見た。

こうなると、山本容子がアタシの、銅版画のセンチと言ってもいい。

もっと本格的なエッチングの技法を習得したい。

プレス機を持っていなかった私は、『自力での習得はムリ』だと判断し、退職した翌月から、銅版画のお教室に通い始める。

近々、バリ島に移住することが決まっていたので、それまでに、自力で作れるようにならないと……。目標はハッキリしていたのだ。

この頃は、紫色に凝っていた。

『フランス製の紫のインク』は、深く腐食された線は黒く、浅く腐食された線は、美しい紫色で印刷される。

なんてキレイな色なんだろう。

『紫色の版画を見たら、アタシの版画だってわかるくらい、紫にこだわろう。』

そんなことさえ考えていた。

文房堂の銅版画のお教室は、2つあった。

勉強できる時間が少ないと知っていたアタシは、集中して技法を学ぶため、両方のお教室に同時に通うことにする。

一つは、小林先生のお教室。もう一つは、作田

先生のお教室である。

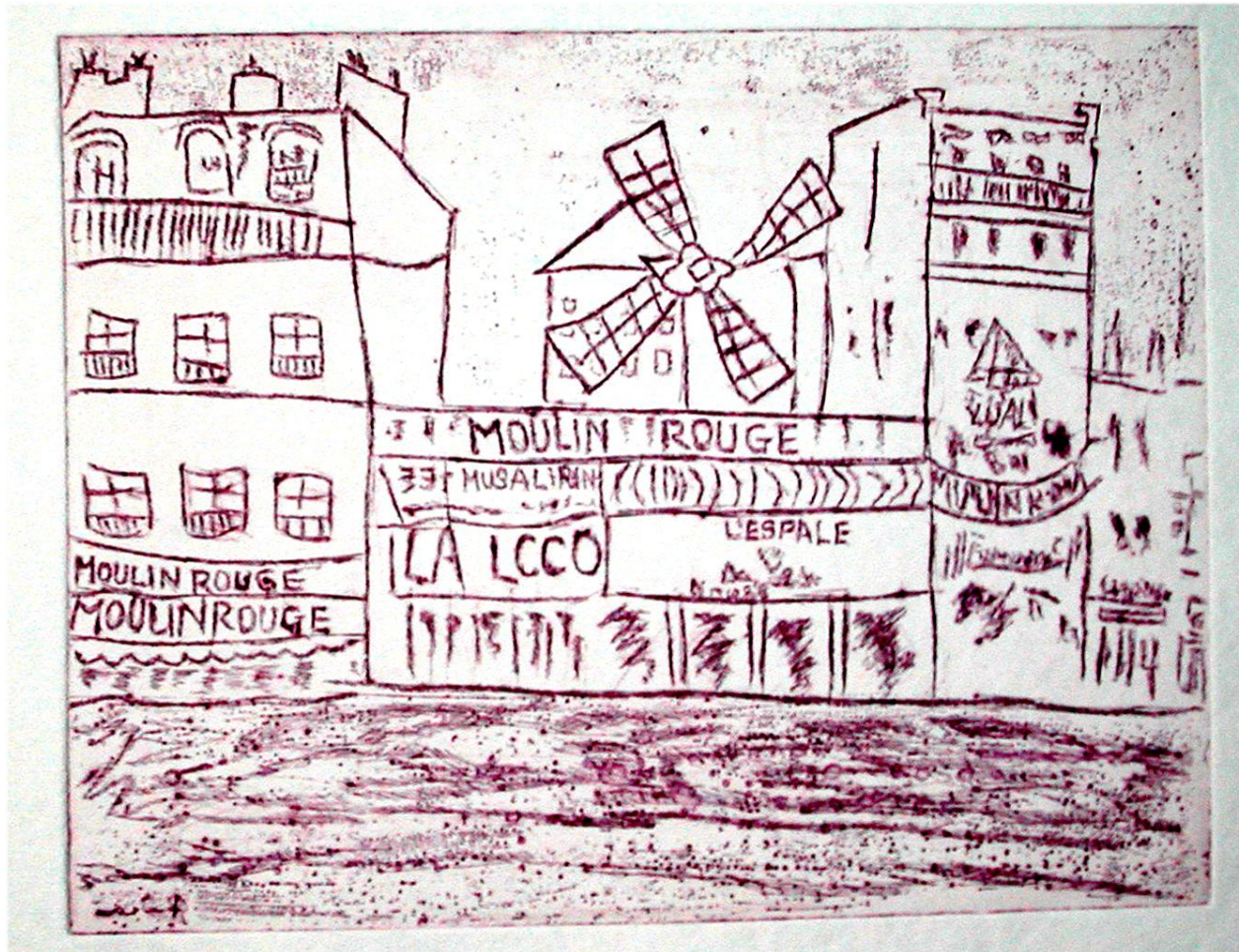
土曜日に開かれていた

小林先生のお教室は、

週末に制作に励む

OLさんが中心。エネルギー

ギッシユな空間だった。



0001

ムーランルージュ(習作)
エッチング、ドライポイント、
アクアチント、
1999年4月制作
後 2002年ごろにアクアチントで加筆
小林先生のお教室にて初の版を作成。

火曜日の午後に開かれる、作田先生のお教室は、主婦や、プロのアーティストが、作品の幅を広げる為に集っているという感じで、みんなマイペースだった。



0002
バリらしい物(習作)

エッチング、ドライポイント、
透明水彩絵の具で加筆
1999年4月制作
作田先生のお教室にて初
回の版を作成。

w8.5×h12cm

先生は、それぞれに、ご自分の考えに従って、作品作りを教えてくださいました。

小林先生からは、おおらかで豪快な版作りを。

作田先生からは、版を大切に扱う、几帳面さや、

緻密さ、さまざまな技法、版画の格調高さなどを教えて頂いた。

両極端な先生方ではあるが、どちらも、私の作品の中に生きていると思う。

二作目を腐食している間に、三作目を作り始める。

三作目には、こんなエピソードがある。

初回のお教室の後、インターネットで知り合った、バリ島が好きな方が集う『オフ会』とやらに参加する。

飲みながら、『銅版画を習い始めたんです。見てみます？』

などと、『バリの女性のスケッチ』を見ていただくと、『デジタル画像』で、私のスケッチを送って欲しいと頼まれた。



バリ島で描いたスケッチ

銅版画にする予定の作品だったので、『一杯ご馳走になったお礼に、一枚お贈りします』という約束をする。

そのときに、スケッチに入っていた文字をどうするのかという話になる。

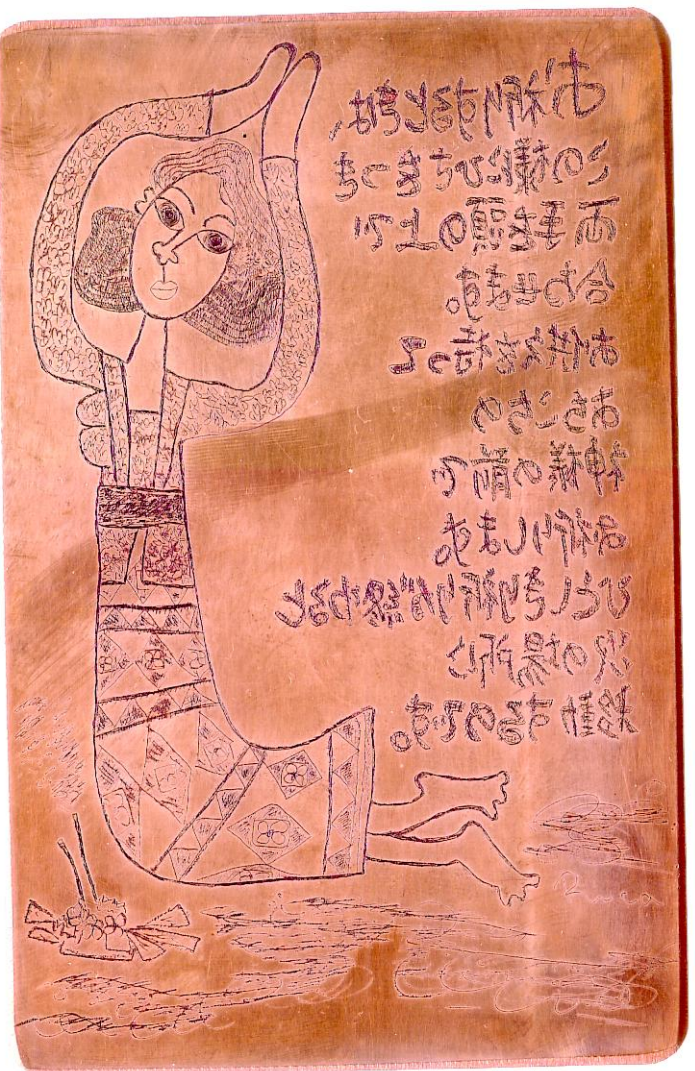
彼は、迷わず、『文字を入れてください』
と決断した。

『絵は下手だもんなあ。』

この、ポストカードの小品には、小さな詩も書かれていたのだが、文字と絵が一体になって、バランスが取れている作品だった。

お教室で、センセイは、

『ホントウに文字をこんなに入れるんですか？』
などと、笑われていたが、アタシは、真顔。



真剣そのものである。

このときは、文字がまだ下手で反転した文字をパソコンよく描ける気がせず、パソコンで下書きをつくり、印刷した文字を反転させて転写する方法を取る。

そうして、『文字を入れる

版画作り』は、ここから、

始まったのだった。

0003

祈り(習作)

エッチング、

ドライポイント、

1999年5月制作

w8.5×h12cm



お教室で、基本的な事を学んだ私は、『山本容子式』というのを、どうしてもやってみたかった。

清水の舞台から飛び降りるつもりで、小さいプレス機を買う。

山本容子先生の番組のビデオも、何度も何度も見ながら、自宅でも作品作りを開始したのである。



0004

基本の座り方というのがある
ソフトグランドエッチング

1999年6月制作

自宅で、硝酸、ソフトグランドエッチングを使った初作品

w5×h5cm

あの頃は、山本容子センセイにかなり傾倒しており、硝酸を使ったり、ソフトグランドを自分で作ったりして、彼女と全く同じ方法で作品を作っていた。



0006
見つけた。
ソフトグラウンドエッチング
1999年8月制作
自宅で、硝酸、ソフトグラ
ンド
エッチングを使った作品

w6×h6cm



0005
まっ一杯
ソフトグラウンドエッチング
1999年8月制作
自宅で、硝酸、ソフトグラ
ンド
エッチングを使った作品

w5×h5cm

軽な作品が多かったと思う。
版画に対する、夢に満ち溢れていて、自由で、気
同じ方法で作れば、最も短時間で、同じ線が作れ
るようになると思ったからである。

その後、山本容子センセイのような、エンピツで描く柔らかい線よりも、もっと強い線を作りたいと考えるようになってゆく。



0007

Katak (習作)

ハードグラウンドエッチング

1999年8月制作

w9×h12cm

左は凸刷り+手彩色

私の作品なのだから、どんな線にするのかは、私が決めるべきなのだ。

作田先生に教えていただき、トレッシングペーパーの上から、ボールペンで描くというのを試してみる。



銅版画というのは、

慣れてくると、どんどんと

作品が乱れてきて、

文字が欠落したり、版に

シミが出来てしまうことが続く。

0008

Getするまで気合で（行こう）

ソフトグランドエッチング

1999年8月制作

w9×h12cm

『行こう』という文字は



0010 俺がロックだ！
ソフトグラウンドエッチング
1999年8月制作 w9×h12cm

なかなか、作品が安定しない状態だったにも関わらず、バリに発つ日が来てしまう。



0009 全てを受け止めてあげる
ソフトグラウンドエッチング
1999年8月制作 w9×h12cm

私は、ギリギリまで、作品を作り続けた。
冷房の無い部屋で、ポタポタ汗を垂らしながら、銅
板を磨いたり、ベランダで腐食を繰り返して、自分
の線を探していた。



0011 ビンタンが俺を好きなんだ！
ソフトグラウンドエッチング
1999年8月制作 w6.5×h10cm

線も、文字も、なかなか思うようには作れず
いた。

ビザの関係もあり、どちらにしたって、二カ月後
には帰国することになっていた。

バリ島で、ホントウに銅版画が作れるんだろう
か？

0013 少しずつ何か
を忘れて、少しずつキ
レイになる。
ソフトグランドエッ
チング
1999年8月制作
w11.5×h18cm



少しずつ
何かを
忘れて、

少しずつキレイになる。



好きな事をして
生きなくちゃ!!

0012 好きなことをして生きなくち
や!!
ソフトグランドエッチング
1999年8月制作 w5×h5cm



0014
ちょっぴりドキドキします。
ソフトグランドエッチング
1999年8月制作
w11.5×h18cm

そんな不安を感じながら、初めてのバリ島長期滞在（二ヶ月）はスタートしたのだった。

行ったり来たり

バリ島では、まず、ベンジンを探さなくてはならなかった。

それから、『硝酸』もしくは、『第二塩化鉄』という、腐食液。紙だって探さないとならない。銅板だって、どこで買えるのやら見当もつかない状態だった。



0015
マジックの猫(アクアチントの習作)
マジックで描画 アクアチント、
黄色で凸刷り
1999年12月制作 w7×h10cm

『インク』や『グラウンド(エッチングに使う防食材)』など、日本でも画材店でしか入手できない専門的な品は、バリ島では調達できないと考え、日本から持参することに決める。

銅板等の原始的で、必ずあると考えられる品や、
空輸できない危険物は、どうしても、バリ島で調達
しなければならぬ。



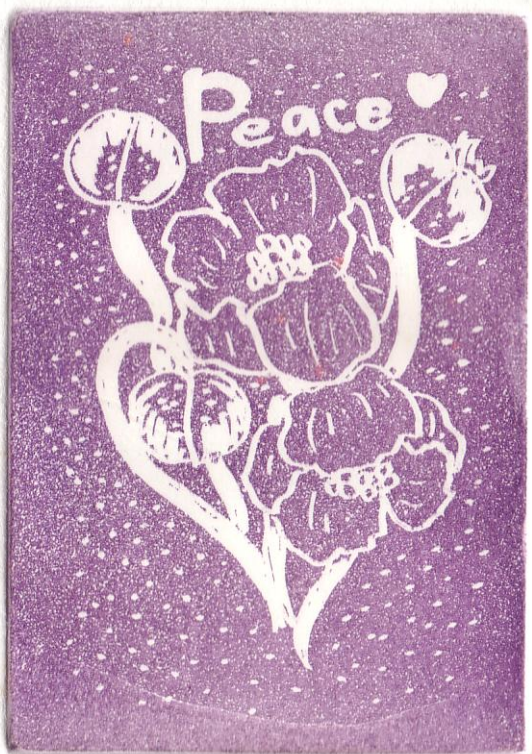
0016 行ってらっしゃい
ソフトグランドエッチング、
1999年12月制作
w7×h10cm

バリ島での物品調達は難行する。

家探しが、より優先されていたので、版画のこと
などに、時間を割いている場合ではなかったという
こともある。

日本に帰国した折には、その期間、作田先生のお
教室に寄らせていただく。

お教室に通い、新しい技法を教えて頂き、現地で調達できそうな品で作品を作れるような指導をして頂く。



0017

Peace(アクアチントの習作)
マジックで描画 アクアチント、
1999年12月制作

w7×h10cm

『センセイ、ベンジンが見つからないんですけど、
どうすればいいですかね?』

こんな質問、どこのお教室だって、前代未聞だろ
う。

『バリ島にはあれが無い、これが無い』
の大連発に、お教室は、爆笑の渦。

『オジヤラさんが帰ってくると、お教室が賑やかですよねー。』

『ウルサクて、スミマセン。』

そうして、インクの拭き取りのホワイトガソリンは、灯油で代行、グラントを薄める液は、テレピン油を使うように教えていただく。

作田先生の、版作りに対する深い知識には、本当に驚かされた。

私の知識では、乗り越えることができない専門知識の壁を、どの質問も、明確にお答えて頂けた。

先生の作品が、膨大な試行錯誤の積み重ねから来ているのだなあと理解できる。

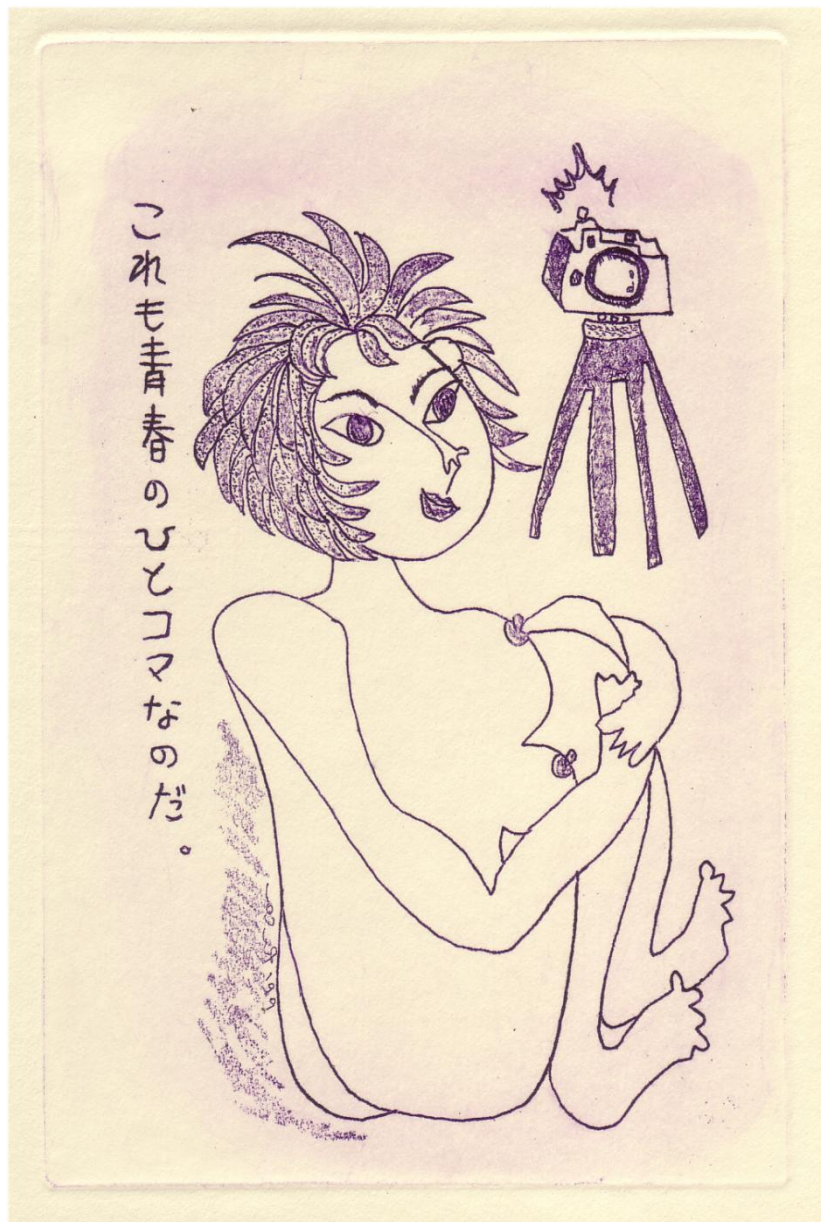
先生のように、マジメに制作に取り組まれている芸術家は、必ず世に認められる。

0018

これも青春のひとコマなのだ。
ソフトグランドエッチング、

1999年12月制作

w11.5×h18cm



そうではなくてはならないし、そうに決まっている。

と、同時に、何が何でも、『バリ島で、銅版画をやる』という、勇気も頂いた。

もし、作田先生に教えていただいたのでなければ、バリ島での銅版画の制作は、この時点で、断念していたはずなのだ。



0019 さあいけ今行けすぐに行け
ソフトグランドエッチング、

1999年12月制作 w7×h12cm

『五百年も前から作っていた人がいたのだから、バリ島で作れないはずはない。』
などと、この頃は。安易に考えていた……。

もともと、ノー天気で、脳みそ足りないもんなあ。

そういえば、バリ島に行くのに、余分な荷物を処分するという目的で、フリマというのに一度参加したことがある。バリ島で買ったトンボ玉や、銅版画も売ってみた。

銅版画は一枚も売れなかったけど、トンボ玉は、一個百円で、十個売れる。

フリマという場所は、『不用品な品を安く買いたい人』が集まる場所で、芸術に親しみたい客から遠いということとは理解できた。

もし、売るのであれば、もっと金持ちがいそうなエリアの露天とか、芸術祭などに参加するべきだろう。自分の作品を、不用品の中で売るのは辞めようと思ったアタシ。

そういえば、自分の作品が、フリマで三千円で売れた方が、お教室にいたよなあ。アタシには、二万円程度の価値はあると思える、素晴らしい作品だ。

やっぱ、フリマは、芸術販売には向かない。

これまでに、紫色で作品を作ってきたが、二十番の『想う』という作品は、何故か、黒で刷っている。

確か、日本で最後に作った作品だったと思う。版のコンディションや、絵の感じがヨカッタので、バリ島に持って行ったのだった。

あとのは、全部、日本に置いたまま旅立った。

このときは、色をつける予定だったので、色彩的に、黒い線のほうがいいと判断したのだと思う。



0020

想ふ

ソフトグラウンドエッチング、
透明水彩絵の具で手彩色

1999年12月制作

w7×h10cm

それに、紫インクは、銅版画のインクの中でも、一番高い色で、バリでの試作の段階では使えないとも考えたはずである。

この程度の作品であれば、売れるかなあ……。な
どと期待しながら、バリ島での生活が始まった。

ソフトグラウンドエッチングの線を、掴みかけた時
だった。

作品が増えてきて、フリマに出展することもあり、
印刷数の管理に困らないようにと、この頃から、銅
版画の管理ノートを作り、制作した版や、試刷りの
保管を、キチンとするようになった。

私の場合、この先、何百枚も作る可能性すらある
からである。

他の作家さんたちは、一体どうしているのだろう。
そんなことを考えながら、刷った作品をバインダ
ーに入れて、管理表に作った枚数を記帳していった。

バリ島では、住む家も決まり、十一月の下旬、いよいよ、プレス機と猫を連れて、バリ島に旅立った。

飛行機で持ち込もうとした危険物（液体グラウンド 2リットル）は、成田空港で没収されてしまい、気絶しそうになる。

プレス機は、シンガポールでも、インドネシアでも箱を開けられて、爆弾じゃないことを確認される。

確かに、爆弾に似ているもんなあ……。没収されな
いでヨカッタよ。

この先も波乱なおお？

バリ島での制作(黒の時代)

家の改築工事などを進めながら、まずは、灯油を
ゲットする。

その他板金屋さんで銅板もゲットできた。

まるで、ドラゴンクエストの様な、ロールプレイ
ングゲーム状態。

『オジヤラは「銅板」をゲットした。銅版画制作開
始まで、あと、百五十ポイントです。ピロピロピロ
ーン』

『オジヤラは、ナリタで「グラウンド」を没収される。
ダメージ二千。ダダダダーン。気絶。銅版画制作は
危機に直面する。』

アタシのすごいところは、グラウンドを没収された
程度では、諦めなかった所だろう。

ベンジンはとうとう見つからなかったが、代用方法を教えて頂いたので、とりあえず、それで作品作りを進めることにする。

一番時間がかかったのは、『硝酸』を探すことだった。

外国で、物品を調達するときに、一番初めにすることは、『現地語で、何という名前』なのかを調べることである。

『硝酸』という名詞は、日本→インドネシア語の辞書には載っていない。

ボロイ辞書だぜ。つたく。

仕方がないので、英語で調べてみる。英語名では、買い物できないので、英語→インドネシア語の辞書を持っている友人に、調べてもらおう。

しかし、その名前を頼りに買った品は、明らかに違うモノだった。(固形)

私は、町まで出かける際には、「山本容子」の銅版画のテキストを持ち歩き、粘り強く「硝酸」を探し続けた。

ある日、家具のオーダーメイドの為に、家具屋を尋ねると、その御曹司が、

『僕は、昔、ジャカルタの美術学校に通っていたんだよ。』などと話はじめる。

『おおっ。それじゃ、銅版画の事、知っている?』

そうして、彼に、腐食液のインドネシア名称を書いてもらって、売っている店まで教えてもらう。

『いやーっ、助かったわあ。』

たぶん、こんなに早く、探している品名を知っている人に出会えたというのが、アタシの運の良さなのだと思う。

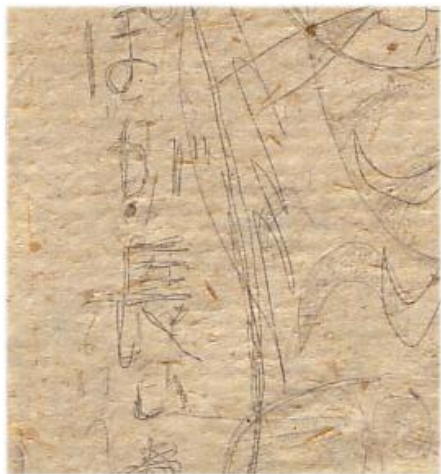
インドネシアというのは、『硝酸』探しで、三年位、経ってしまう可能性だってある国なのだ。

こうやって、『灯油』『銅板』『腐食液』を手に入れたアタシは、やっと、銅版画の制作に入ったのだった。

これは、バリ島で、一番初めに作った作品。

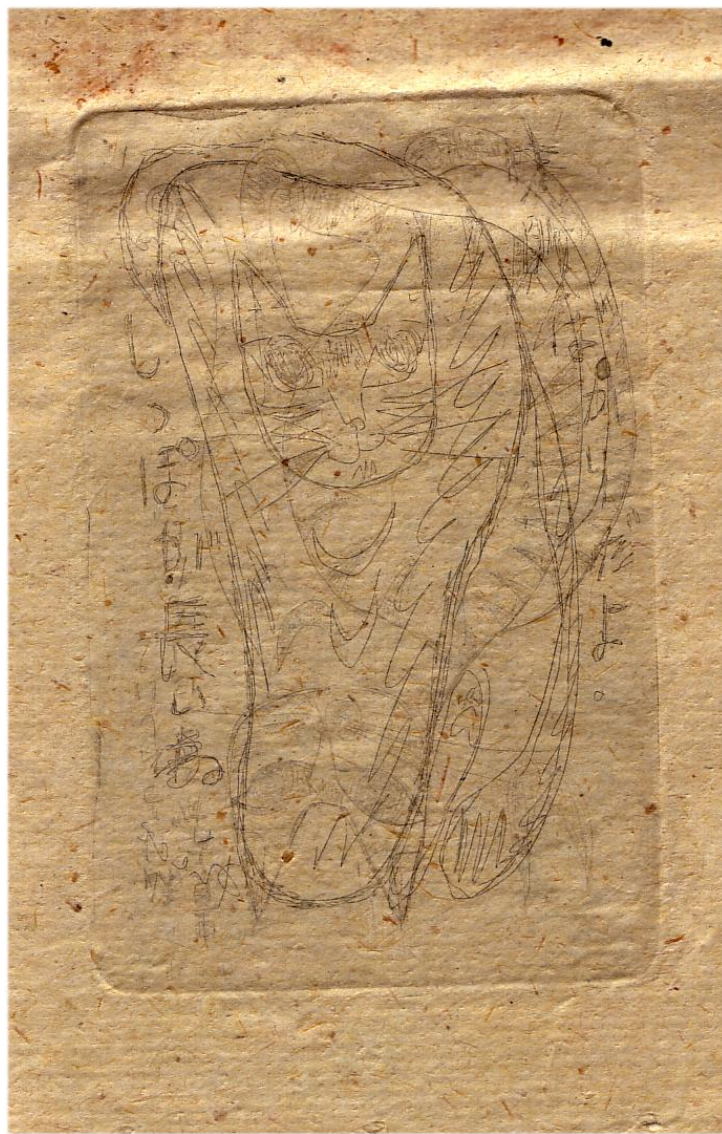
当時の銅版画制作ノートに貼り付けてあるのだが、『2000年、四月二十六日開始。ミレニウム。』と書いてある。

たった三つの品を手に入れるまで、
九カ月もかか
ったということである。



0021
しっぽが長いね(バリ島での習作)
ソフトグラウンドエッチング、

2000年5月9日制作
w7×h10cm



薄黄色の紙は、わら半紙に、バナナの茎を混ぜて作った再生紙のメモ用紙で、近所の土産物屋で、安く手に入る。

線が細すぎて、紙の色が濃すぎて、なんだかよく解らない。

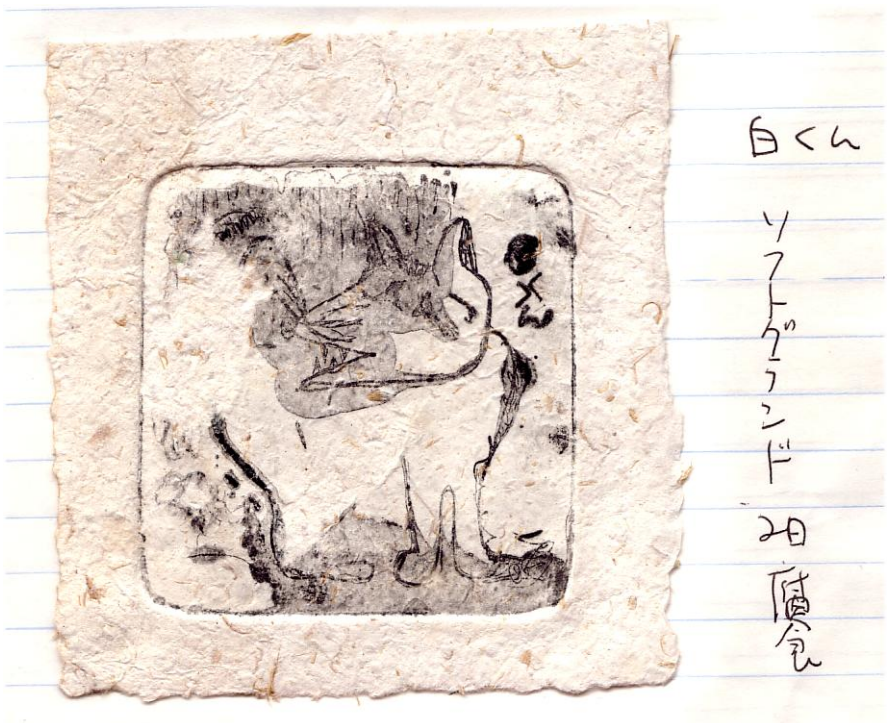
当時の記録は、こんな感じである。

銅版画ノートよりの引用

4 / 26 銅版が届く。傷をチェックし、一部をやり直させる。(このときは、銅板を、金を払って、銀細工屋に磨きに出していた。)

小一枚 7センチ×7センチ。
一時間腐食液につけるも、全く腐食されず。

(このときは、テキストに従い、硝酸を5倍位に薄めて利用していた。)



グラントをはがしてしまっただため、再度グラントを塗り直す。

もう一枚、8センチ×8センチを描いて腐食する。
翌朝取り出して見るも、引っかき傷程度しか腐食
されていない。

0022

白くん(バリ島での習作)
ソフトグランドエッチング、

2000年5月9日制作

w7×h6cm

手で加筆して印刷してみる。



0023

ひとやすみ(バリ島での習作)
ソフトグラウンドエッチング、

2000年5月9日制作
w5.5×h6cm

その後3日漬けてみるも、やはり充分とはいえない。

トレッシングペーパーを使わずに試してみたが、板に何か塗ってある可能性もある。

板に、エンピツではなく、ニードルで直接描いてみる。

一部グランドをはがしてみるが、やはり、余り腐食されていない。

5月11日

結局硝酸は、原液を利用することにして再度腐食させる。

最初に薄い液に漬けていたせいか、ソフトグランドやマジックで止めていた部分がはがれてしまった。

しかし、かなり期待できそうである。

結局、ソフトグランドに、直接ニードルで書き込むことにした。

トレペを使い、エンピツで描いた線も試してみることにした。

4日後、グラウンドをはがして印刷してみる。



0024

願いを込めて！(バリ島での習作)

ソフトグラウンドエッチング、ニードルで直接描画。下のサイン及び背景は、トレペを使い、HBのエンピツで描く。腐食4日 2000年5月9日制作 w5×h5.5cm

かなり強い線ができた。

エンピツを使った所は、黒すぎる感じだ。

以上銅版画ノートよりの引用

最初の腐食ができるまで、何日もかかっていた。
その次には、紙も探さなければならなかった。



とりあえずは、持参した

紙や、友人の画家が、お土産に
もらったという、水彩紙などを
利用して、版画を作り始めた。

インドネシアの紙は、薄い。
ノリも粗悪で、紙には、大量の
ノリが混ぜられている。

0025

ようこそ!

ソフトグラウンドエッチング、

グラウンドがはがれて、失敗 版は再

利用 2000年5月制作

w5×h5cm

地元で作っている、和紙のような、特徴のある紙には、藁や花びらが混ぜられていて、キレイなのだが、版画の線が死んでしまうのだ。

そして、自然の素材で作られているので、紙には、カビがはえてきてしまう。

『バリ島で、紙にカビが生える。』
当たり前のことである。

しかし、カビが生える事が解っている紙に刷るわけにはいかない。

カンタンには行かないという覚悟はあったものの、アタシは、自分が手に入れられる、あらゆる紙で、テストを繰り返さなければならなかった。

インターネットで公開している私のホームページは、結構人気があるみたいで、チョコチョコと、お友達になった方に、荷物を持ってきて頂けた。

グラウンドを薄めるテレピン油とか、版画紙とか、固形のグラウンドというのを荷物に入れてもらって、版画の制作は細々と続いていた。



0026

今年の夏は、人魚になる。
ハードグラウンドエッチング、
2000年5月16日制作
w6.8×h9.8cm 厚さ1mm

結局、手に入れかけていた、『山本容子式』は、継続を断念する。

ハードグラウンドエッチングに切り替え、固形グラウンドをテレピン油で戻したグラウンドで制作を続けてゆく。



0027 小さな夢があります。
ハードグラウンドエッチング、
2000年5月19日制作
w6.8×h9.8cm 厚さ1mm

腐食力が弱いので、長時間液に漬けるものだから、折角作ったプレートマークがガタガタに痛んでしま

う。
この頃から、セロテープを使い、周囲を保護してから腐食液につけるようになった。

プレートマークがキレイだと、線がグツと引き立つからである。こういう、細かい作業の手間を惜しまないようになれたのは、作田先生に教えて頂いたからだろうと思う。

版画ノートには、この頃の苦労がこと細かに記載
されていて、見返すと、頑張っていたなと思う。



0028

Tell Me

ハードグランドエッチング、

2000年5月19日制作

w6×h6cm 厚さ1mm

硝酸による腐食は、温度とも深い関係があり、気
温が熱いバリ島では、安定した線を作るのは大変だ
った。

腐食は家の外のテラスで行っていたのだが、気温
が高いので、水分が蒸発し、水滴がフタにつき、そ
れが、硝酸の中に落ちて煙が出てしまうというのを
繰り返していたみたいで、危険極まりない状態だっ
た。



0029

ゆっくりと

ハードグラウンドエッチング、

2000年6月9日制作

w5×h6cm 厚さ1mm

硝酸で作った腐食の溝は、表面は小さく、内側が丸い状態で腐食されるので、刷りを進めて行くうちに、表面が広がって、線が太くなってくるということも解った。

銅板の表面を強化したいよなあ。ニツケルでメッキすると、版を傷つけずに、何百枚も印刷できるらしいけど……。

日本ではカンタンに思えることも、バリ島でやるのは大変だった。

テストの結果、線は、少しずつ安定してきた。



0030

ケッコウ ケッコウ

ハードグランドエッチング、

2000年6月11日制作

w7×h10cm 厚さ1mm

私は、腐食時間を記録しながら、イロイロな紙に印刷しては、彩色したあとの色の具合とか、作品のヨレなどをチェックする。

薄い紙に印刷すると、刷り上がったあと、紙が縮み、乾いたときに、ヨレっとしてしまう。

刷りは、何にでもできたのだが、安い紙は、彩色すると、絵の具は、紙に吸い込まれてしまい、にごってしまうのだ。

この紙では、作品がすぐに劣化してしまう。

もつと、ちゃんとした紙を探さないと…。



0031

One by One.

ソフトグランドエッチング、

2000年6月11日制作

w7×h10cm 厚さ1mm

プレス機が小さいので、A5サイズまでしか印刷出来なかった。それでも、A5の作品にもチャレンジしようとしていた。

今までは、手頃なポストカードサイズが中心だったが、もう少し大きい作品も作ってみたいと思うようになったからである。

小さい作品しか作ってこなかったもので、大きい版は、余白のとり方が難しい。

グランドの具合も、安定せずに、
版全体にシミができてしまったり
してしまうことも多い。
大きいと銅板が高いので、
ヒヤヒヤしてしまう。

0032

全ての駒が助け合う
ソフトグランドエッチング、
2000年6月制作
w12×h16.5cm 厚さ1mm



この絵は、将棋の番組で出ていた女性の棋士の絵。
全く似ていないのよねえ。



懲りずに、ソフトグランドで
失敗を繰り返していたアタシも、
とうとう、ソフトグランドを
諦めることにした。

0033
気楽にいこうぜ
ソフトグランドエッチング、
2000年6月18日制作
w12×h16.5cm 厚さ1mm

画面全体に湧き上がるシミに、
絶えられなくなっ
たのだ。

大きい版は、失敗すると、懐に響くからである。

紙にも、そろそろ、結論が出始めた。



折角手間をかけて刷っても、

インドネシア製の紙だと、

安っぽく見えてしまうのだ。

(原価も安いのだが…)

0034

自分探しの旅に出よう

ハードグラウンドエッチング、

2000年6月18日制作

w12×h16.5cm 厚さ1mm

その辺の土産物店で、土産物価格で販売するのだから、安っぽい紙でもいいような気もする。でも、ちゃんとした作品と並ぶと、差が歴然となり、本当にガツカリとしてみまうのである。



日本のお客様は目が肥えているので、安い土産物であっても、粗悪な品など売れることはないことは明白だった。

0035

清められた花で歓迎します。
ハードグランドエッチング、
2000年6月制作
w12×h16.5cm 厚さ1mm

そうして、何枚か作るうちに、
絵が下手だということに
気付いてくる。



0036 Think
ソフトグランドエッチング、
2000年8月30日制作
w8.5×h9cm 厚さ1mm

『この版画を売るのは、ムリだよなあ。うん。』

オジヤラよ。肝心なことに、気がつくのが遅すぎるぜ。

もう少し、絵が上手くならないとなあ。。。。

でもまあ、このときには、そんなに恒常的に作品やスケッチをしていたワケではない。



0037 華やいできますか？
ハードグラウンドエッチング、
2000年8月30日制作
w7.5×h9.5cm 厚さ1mm

気が向いたらパソコンをやり、二カ月に一度はシンガポールや台湾などを旅して、あとは、ダラダラと怠惰な生活を送っていた。

版画は、その度に中断され、プレス機は、棚の中に入れられて、何ヶ月も、そのままだったことも多い。

そうして、時間がポカリと空くと、銅版画でもやろうと考えて、銅板を引っ張り出したり、紙を水に漬けたりする。

毎日が、そんな感じだった。

最初に買った銅板は、在庫が、なくなりつつあり、次の銅板を調達しに行く。



0038 髪を短く切った。新しい私になった。
ハードグランドエッチング、
2000年8月30日制作

そうすると、銅板が売り切れていた。
いつ入るのか解らないらしい。

バリ島の建築資材などは、ほとんどがインドネシア諸島からの輸入品で、その供給はとても不安定なのだと思います。

結局、工事資材なんかに詳しい人に、遠くまで買いに行ってもらって、銅板を何とか調達する。

今度は、磨きに出そうとして、断られてしまう。

一枚五十円程度で『銅板磨き』を頼んでいたのだが、引き受けてくれていた銀細工屋は、忙しいからと断ってくる。

最初は、版を磨く機械を持っているなどと話していたのに、実は、出稼ぎの小僧に、手で磨かせていたらしい。

強酸につけて、銅板を磨く作業は辛い作業であり、小僧がみんな、田舎に逃げ帰ってしまうのだそうだと知らないとはいえ、悪いことをした。

一時が万事、こんな感じで銅板の調達という、基本的なことさえ、何かしらと時間がかかり、苦勞も耐えないのだった。

ブルーインクの時代

日本に帰国したときに、シャルボネールというメーカーの、フランス製の銅版画のインクが安く売られていて、一缶買って来た。



0039 気ままに。
ハードグラウンドエッチング、
2000年8月30日制作
w8.5×h9cm 厚さ1mm

版が安定してきたので、『おふらんすの青いインク』を試してみることにした。

なんてキレイな青なんだろう。

デープエッチングは、深く腐食された部分は『黒く』、浅く腐食された部分は、鮮やかなインクの色で表現される。



0040 Wait for the night
ハードグラウンドエッチング、
2000年8月30日制作

シャルボネブルーは、ヴィオレ(紫色)と同じように美しく輝いた。

バリ島では、この頃作った作品が、一番充実していたように思う。

鏡面に磨いて、優しくカーブを描いたプレートマークをつけた銅板は、作品になったときに、特に美しい。



0041 Wait for the night

ハードグランドエッチング、
2000年8月30日制作

次の銅板が手に入らなかったもので、アタシは長期間、制作を中断しなければならなかった。

ビザの関係で、頻繁にシンガポールに出なければならなかったこともあり、『紙』はそのときに調達する。

シンガポールで版画紙を買うと高いので、三百キロの厚い画用紙を使うことにする。

三百キロの紙は、印刷したあと、水張りをしないでも、ヨレずに乾燥してくれるのだ。

作品を大量に作るし、どの作品も小さい作品なので、水張りをするのは物理的にムリ。



0042 しなやかに
ハードグラウンドエッチング、
2000年12月制作
w8.5×h9cm 厚さ1mm

そんなもんで、多少高いけど、厚手の紙を使うことに決める。

一枚百八十円の紙を六等分して使うので、一枚当たりのコストは三十円程度。テストや試し刷りには十分な品質だった。

しかし、どんなに探しても、バリ島では、満足する品質の画用紙は売っていなかった。



0043 きりりと
ハードグランドエッチング、
2000年12月制作
w7×h10cm 厚さ1mm

シンガポールの紙専門店に行き、まとめて紙を買ってくる。

この紙が無くなるまでは、これで行こうと決める。銅版画で刷った場合、紙の表面に油膜が残るのか、水彩紙に刷ったとしても、色塗りは難しかった。それであれば、色をつけないという作品を目指すというのも、一つの道かなと方向を修正したのである。



0044 ときめいて
ハードグラウンドエッチング、
2000年12月制作
w7×h10cm 厚さ1mm

自分で作品を作っていると、山本容子や、作田先生の技術との差を思い知る。

さりげない作品であっても、銅版画であんなに美しく彩色できるなんて、刷りの時の、インクの拭き取りがキチンとしているからなのだ。

銅版画の刷りは難しい。

この頃の版画ノートを見てみると、腐食時間は、四時間から二十五時間となっている。

二十五時間つけた版画は、こんな感じ。



0045 あるがままに
ソフトグランドエッチング、
2000年12月制作
w8.5×h9cm 厚さ1mm

ブルーのインクは、どちらかというとき黒く見える。
それ位、溝が深いのだ。

デジタル画像になるとよく解らないのだが、一つ
一つの線が、クッキリと盛り上がって、触ると凸凹
している。

文字のかすれや欠落もなくなってきた。

あとは、メインの絵のスキルをあげれば、もっと、
見れる作品になるという計算だ。

絵のスキルを上げるのが一番最後というのがまた、アタシらしい。

このときには、絵がどうしたら上手くなるのか、よく解っていなかったのだ。どちらかといえば、『下手絵』系でもいいかなと、安易に考えていた。



0046 Act as usual
ハードグランドエッチング、
2000年12月制作
w7×h10cm 厚さ1mm

絵を描く力を上げるのには、自分の手で、大量に描くしかない。

この頃、私が住んでいる村、『ウブド』で、毎週、ヌードデッサン会が開催されているという情報を得

る。無料の広告新聞に、デッサン会の広告が掲載されていたのだ。



0047 GO
ハードグランドエッチング、
2000年12月制作
w7×h10cm 厚さ1mm

私は、まだ一度もデッサンというのをしたことがなかった。

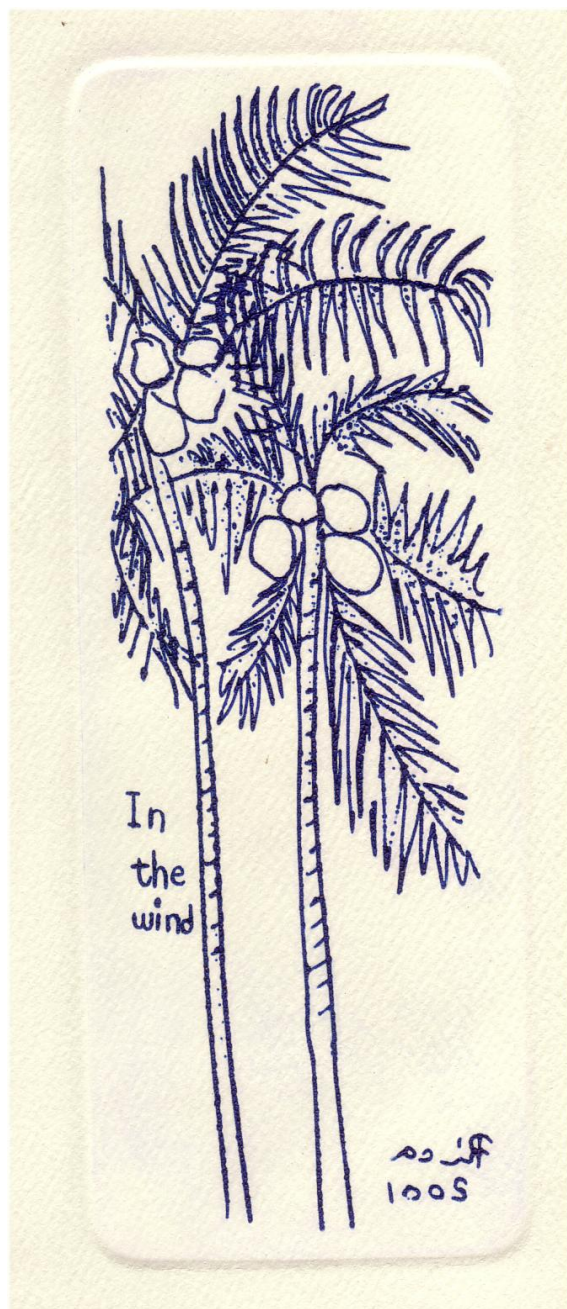
ポストカードに絵手紙を描いたり、ボールペンで、絵日記用の小品を描く程度で、デッサンをしようと考えたことも無かったのだ。

しかし、銅版画を見るたびに、
もう少し絵が上手にならないと
ダメだということは理解できた。

描画に対する欲が、初めて
出てきたのである。

近くで開催されているということもあり、一度、
『ヌードデッサン会』とやらに、行ってみることに
する。

いきなりヌードを描くなんて、当然に、うまくい
きっこなく、紙には、顔しか入らないとか、体の半
分は継ぎ足した紙に描くとか、そんな状態が続く。



0048 In the wind.
ソフトグランドエッチング、
2001年3月制作
w7×h18 cm 厚さ1mm

メンバーは全部白人女性で、（女性のデッサン会だったため）みんな、バリ島での愚痴などを話しながら、デッサンをする、一種の社交場のような場となっていた。



0049 デジタル。
ソフトグランドエッチング、
2001年3月制作
w5×h5 cm 厚さ1mm
この作品も、腐食が深すぎて、ブルーのインクが真っ黒に見える。ブルーが盛り上がってできた黒というのに、なんともまた、味があるのである。

『最後の楽園』などと呼ばれていても、滞在者は、苦勞が尽きない。

生活に関わる情報交換や、自分や友人のトラブルの報告、バリ島の暴動事件、テロ事件、など、テレビを持っている方が、持っていない方への情報提供という部分もあった。

あらゆる会話が、デッサン会で交換されていたのである。



0050 小さな本物
ソフトグラウンドエッチング、
2001年3月制作
w10×h7 cm 厚さ1mm

デッサン会には、最初こそ、ボチボチと通っていたが、雨季になったり、全く上手く描けるようにならないかったので、もう、行くのを止めてしまうのだ。

黒の時代再び

一旦は断られた銅板磨きを、また引き受けると言い出してきた銀細工屋は、やっと、銅板を届けてくれた。



シルバーアクセサリーを作る
単価と比較すると、原材料の
仕上げをする工賃は、
メチャクチャ安かったのだろう。

0051
朝摘みの花の匂ひ君に似て。
ソフトグランドエッチング、
2001年4月制作
w7×h18 cm 厚さ1mm

もう、二度と引き受けてはくれなかった。

どちらにしたらって、鏡面・プレートマーク付き銅板が二十枚程届き、アタシは、もう少し、銅版画を続けることになった。



この頃の版画は、不安定だった。

久々に再開したため、アタシは、グラウンドを定着させる、テーパーという工程を、全く忘れてしまっていたのだ。

0052

泣いても変わらぬ日々なら
笑っていくさひとりでも。
ソフトグラウンドエッチング、
2001年4月制作
w7×h18 cm 厚さ1mm

テーパーしないと、グラウンドが、銅板に定着しないので、長時間の腐食をしている間に、グラウンドが、線の部分から欠落してしまうのだ。

そうすると、写真の画像のように、線の周辺がグ
レーに腐食されてしまい、線が汚れてしまうのだ。



グレーのシミを、サンドペーパーで、

丁寧に消して、黒い線だけを

残してゆく。

その作業に苛立った。

長期に保存していた、テレピン

油で溶いたグラウンドが劣化していたこともあると思
う。

熱帯の気温というのは、想像以上に過酷であらゆ
るものが劣化していった。

0053

秘めし想ひ隠し切れず葡萄の瞳

ソフトグラウンドエッチング、

2001年4月制作

w7×h18 cm 厚さ1mm

俳句を銅版画に入りたいと考えるようになったのもこの頃である。



俳句の方は、俳句の方で、
全くの素人だったため、お粗末
だった。見かねたネットの俳句
のお友達が、特訓を申し出て
下さった。

0054
春にひとつだけ咲きて
風に揺れて。
ソフトグラウンドエッチング、
2001年4月制作
w12×h18 cm 厚さ1mm

私の俳句は、この時期からスタートしたのである。



俳句を続けていると、銅版画と、
俳句というのは似ていると
思うことが多い。

俳句は、瞬間を捉えて、
短い文字に凝縮させるという
芸術である。その中には、心の
動きとか、感動が入っている。

0055

チャンスを待っている。
ソフトグラウンドエッチン
グ、

2001年4月制作

w12 × h18 cm 厚さ

絵画制作というのは、もともと、
瞬間を二次元に
写しだす作業なのである。



絵を見て感動するのは、
絵の中に、感動が描かれて
いるからに他ならない。

絵を描けない場所でも、
俳句は、作れる場合が多い。

俳句を作ること、瞬間や感動を切り取る訓練に
なっていると知られる。最近では、版に刻むとい
うだけでなく、作品全体が、瞬間を意識する絵に変
わってきたよう思う。

0056
Welcom
ソフトグラウンドエッチン
グ、
2001年4月制作
w 12 × h 18 cm 厚さ



0057 あきらめないで ヨかった
ソフトグラウンドエッチング、
2001年4月制作
w9×h9 cm 厚さ1mm

そんな時に、ネットでお友達になった、絵を描く方で、バリに来るといふ方がいた。

そんなもんで、デッサン会に一緒に行こうということになる。

アタシのホームページを見てみると、友人が来たのは、二〇〇一年の十月ってことになっている。丁度雨季が終わった頃なのかあ。



久しぶりに
話そうよ、
昔のこと
彼のこと
仕事のこと
夢のこと

2001
4月

0058 久しぶりに話そうよ
ソフトグランドエッチング、
2001年4月制作
w18×h12 cm 厚さ1mm

デッサン会に、最初に通い始めたのが、二〇〇〇
年の十月頃なんで、もう、一年もサボっていたのよ
ねえ。

この時、お友達と一緒に、銅版画の作品を作る。

彼女も、『山本容子式』に憧れがあり、ソフトグラ
ンドで小さい作品を二枚作る。私は、記念に一枚づ
つ頂いた。

彼女の作品は、メチャクチャかわいい作品だった。
その作品は、額に入れて、今でもアトリエに飾って
ある。



0059 Love
ソフトグラントエッチング、
2001年4月制作
w9×h9 cm 厚さ1mm グラントを塗った
銅板の上を、猫が歩いたので、足跡が付く。
足跡の周りに描画。

そうして、作品を見るたびに、彼女と買い物に行
ったことや、アトリエで銅版画を作ったことなんか
を思い出す。

絵には、思い出を引き出す力があり、それは、『魔法のようだ』と、よく感じるのだ。

版画というのは、何枚も作れるので、気軽にプレゼントしたり、交換できたりするところがいい。



0060 愛されて
ソフトグランドエッチング、
2001年4月制作
w9×h9 cm 厚さ1mm グラントを塗った
銅板の上を、猫が歩いたので、足跡が付く。
足跡の周りに描画。

彼女は、バリ島の観光地をあちこち旅しては、スケッチを描き続け、一カ月後に、ウブドに戻ってきたときには、絵が飛躍的に上手くなっていた。

『やっぱ、描かなきゃアカンなあ。』

自分でカットした銅板の時代

磨きに出した銅板は、とうとう在庫が無くなって
しまう。



0061 クリームソーダの泡 消えては君の顔
ハードランドエッチング、
2001年8月制作
w9×h9 cm 厚さ0.8mm

銅板の品切れが続いていたために、ジャワ人に頼
んで、別な店で買ってきてもらった銅板には、深い
機械の筋が入っていた。銅板を伸ばすローラーに、
筋が入っているのだと思う。



0062 泣ひたり ときめひたり
ハードグランドエッチング、
2001年8月制作
w9×h9 cm 厚さ0.8mm

この筋は、銅板の両面に入っており厄介だった。
まずは、自力で銅板をカットするのが大変だった。
ノコギリで切るのだが、必ず傷がついてしまうの
だ。電動ノコギリも使ってみたが、早く動きすぎて、
銅板の傷を増やしてしまうだけだった。自力でのカ
ットを断念し、家具の修理に来た小僧二人にお小遣
いをあげて、銅板をカットしてもらおう。
カットした断面は、ボロボロだった。

ガラスのエッジを取るルーターで、プレートマー
クを作ってゆく。



0063 優しい人っていいなあ
ハードグラウンドエッチング、
2001年8月制作
w9×h9 cm 厚さ0.8mm

その後、この銅板を、ピカールなんかで磨くのだが、何時間磨いても、機械の筋が消えることはなかったのだ。

バリ島で入手できるサンドペーパーにも限りがあった。店に置いてあるのは一〇〇〇番が上限だ。ピカピカにするには、二〇〇〇番のサンドペーパーが必要だった。

でも、現地調達できる材料で銅版画を作れなければ、継続は不可能なのだ。入手可能な材料で制作を続けなければならない。

銅板を、もつと金を出して磨きに出すことも考えたが、それはしなかった。

理由は、日本で買う銅板よりも、高くなってしま
うからである。



0064 個性的
ハードグランドエッチング、
2001年8月制作
w9×h9 cm 厚さ0.8mm

日本の物価と比較すると、物価が三分の一程度
の国なのに、日本以上にお金を払うというのは間違っ
ている。

それは、現地人に、不当に金を引き出されている
ということなのである。



0065 今日、なんかついている
ハードグラウンドエッチング、
2001年8月制作
w7×h8 cm 厚さ0.8mm

それに、銅板を磨く機械を持っていないのなら、
アタシがやっているのと同じ方法で、誰かが銅板を
磨いているわけで、それは、あまり楽しい作業では
ないのである。

グラウンドの劣化も進んでいた。
折角苦労して磨いたと思った銅板には、銅板全面に、
小さいピンホールが出来て、画面全体が薄汚れてし
まう。

このときには、グランドの劣化の事は、理解出来ていなかった。

理解できていないことは、改善することもできないのである。



0066 君のまつ毛 ぼくのため息
ハードグランドエッチング、
2001年8月制作
w10×h9 cm 厚さ0.8mm

テーパの工程を忘れていたというのも、作品に響いてしまう。

不規則に腐食されてしまった線の版面は、刷るのがとても難しい版になる。

刷りを断念しなければならぬ版も、何枚も出来てしまい、その度にガツカリする。



0067 きっと見つかる
ハードグラウンドエッチング、
2001年8月制作
w6.5×h8.5 cm 厚さ0.8mm

出来上がった作品は、どんなに吹き上げても、薄いグレーの膜が残り、ボンヤリとした作品になる。

この程度の作品には、高いインクは使えない。だから、黒い作品ばかりということになった。



0068 きっと叶う
ハードグランドエッチング、
2001年8月制作
w6.5×h8.5 cm 厚さ0.8mm

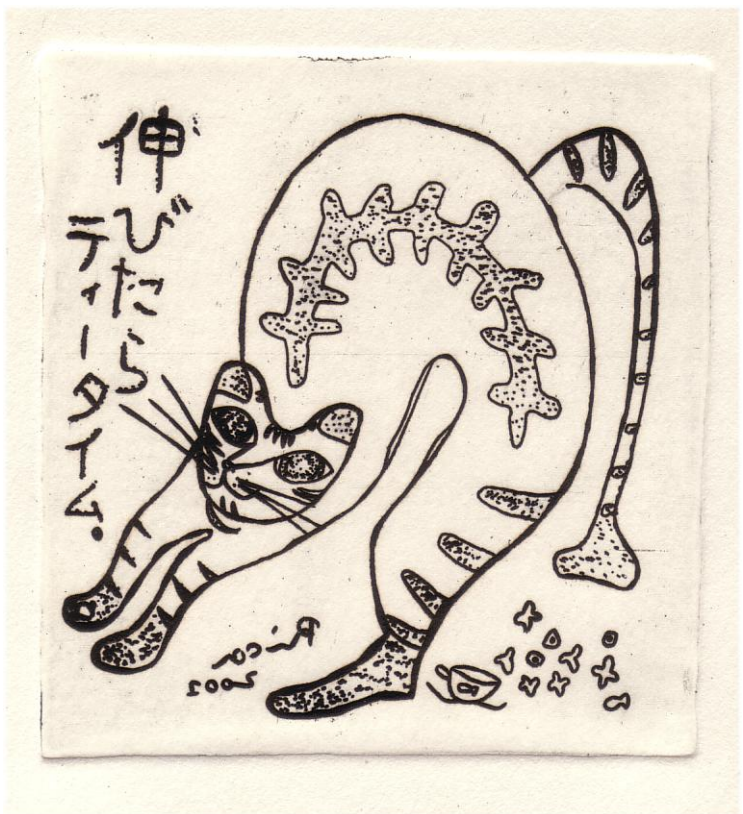
こんなに膜が残ってしまいうのでは、あとから色を彩色することすらできないのである。

テープを忘れたというだけで、作品作りは行き詰まる。

私は、長期に渡り、銅版画の制作を中断せざるを得なかった。

そうして、その間に、ヌードデッサンに通ったり、デッサンをボールペンで書き直す作業を繰り返すようになった。

この頃から、私は、恒常的に絵を描くようになっていったのだ。



0069 伸びたらティータイム。
ハードグラウンドエッチング、
2001年8月制作
w9×h9 cm 厚さ0.8mm

俳句の方でも、多少進展があった。

インターネットで、俳句を教えて頂いたのだが、逆に、句作に、迷うようになってしまっていた。

知識が不足しすぎていて、教えて頂いた基本的な事項すら、理解することができなかつたからである。



0070 まあるく
ハードグランドエッチング、
2001年8月制作
w6×h7 cm 厚さ0.8mm

銅版画に刻んでいる文字を見ても解るのだが、私は、字が下手なのだ。刻まれた文字が下手だと、作品全体がダメになってしまう。

絵のほかに、字の練習もしなければならなかった。

字の練習と俳句の勉強を兼ねて、『種田山頭火』という、自由律俳句で有名な方の俳句を、書き写すという練習をした。



同じ紙に、俳画も描いてみた。

この、俳句を絵にするという
作業で、私の俳句の力は、とても
ついたと思う。

文字を書き取るだけでは、
その、単純な作業に没頭してしまう。

0071 Don't worry
ハードグラウンドエッチング、
2002年2月制作
w12×h11.5 cm 厚さ0.8mm

しかし、絵も描くとなると、俳句を、きちんと理解しなければならぬのである。

理解しないと、絵が描けないからだ。

自分なりに俳句を理解する。

俳句から、映像を思い浮かべ、絵を描き、俳句を書き込む。

先達の俳句が、スッと脳みその中に刻み込まれて、そうして、体で俳句のリズムや、切れなんかを理解していったのだった。

俳句を読む力がついたとき、自分の俳句も作れるようになった。

当時描いた俳画は、全部で百五十余り。稚拙な絵や書であるが、数がまとまると、悪くない感じだった。

このときに描いた俳画と俳句は、パソコンで色をつけて、ホームページで公開した。

このときに、本作りの楽しさというのを知る。

もつと俳句の勉強もしたくて、『尾崎放哉選句集』という、二百九十句の俳句も、俳画仕立てにする。



0072 In my own way
ハードグランドエッチング、
2002年2月制作
w7.4×h7.4 cm 厚さ0.8mm

自分の作品を本にまとめたい。

そんな風に考えて、電子本の研究もスタートする。
本の制作は、二〇〇二年一月一日から スタート
した。

絵日記風エッセイとして、百ページを目標に、原稿作りが始まる。

そうして、そんな折、インターネットでバリ好きで、銅版画を作る方と知り合ったのである。

彼は、テーパーの事を思い出せて下さった。

私は、このとき、テーパーの効果を確認する為に、何点かの銅版画の作品を作っている。

線の感じは良好のだが、銅板にはじめからある小さい筋や、磨きが不十分なことから来る曇り、グランドの劣化によるピンホールは解決せず、制作は行き詰まる。

『絵も字も、もつと上手くならないと銅板がもつ
たいたないぜ』と真剣に思いはじめ、スケッチや字の
練習に力を入れた。



0073 皿の前で粘っている
ハードグランドエッチング、
2002年2月制作
w8.5×h9.5 cm 厚さ0.8mm

その後、五月に、日本に帰国した時に、1カ月程、
バリ島の家を人に貸すことになり、銅版画の道具は、
全て箱にしまわれた。

そうして、帰国の日まで、その箱は開けられないこと
とはなかったのだった。



0074 サボテンの小宇宙
ハードグラウンドエッチング、
2002年2月制作
w5×h9 cm 厚さ0.8mm

帰国後の制作

オットが、急に帰国すると言いはじめたのは、二〇〇二年の十月頃だったと思う。

ヌードデッサンに通い続けた私の絵は、ずいぶんと上達したようだった。

私は、もっと絵に集中したかったので、バリに残りたかったが、結局、全てにカタをつけて、キレイさっぱりと、バリ島を引き払うことに決まる。

あと二年間は、絵を描かせてもらおうという条件付きの帰国だった。

二〇〇三年の五月に帰国。

バリ島から帰国して、アトリエの確保や改修工事などで忙しかったが、八月から、中断していた銅版画を、再スタートした。

帰国後最初の作品。

銅板への描画はうまくいったと思われるが、描画面を下に向けて、新品の腐食液に五時間程つけたら、腐食が深くなりすぎて、線が、銅版を突き抜けてしまふ。



0075

ちょっとガマン ちょっとやせた

ハードグランドエッチング、

2003年8月制作

失敗だった。

文字も、『と』が逆になっている。

ブランクというのは、作品に響くわあ。



0076

ほんわり

ハードグラウンドエッチング、

2003年8月制作

w8.5×h8cm

その後も、手持ちの銅板とグラウンドで、何枚か作ってみる。

こちらの作品は、銅板に、もともと大きな傷があったので、それをカバーするように、わざと、傷をあちこちにつけてみる。

『やっぱ、ダメかあ。』

銅板の磨きが足りないので、全体に曇りが出て、古いグラウンドが劣化しているのか、意図していないシミもできてしまう。

手持ちの固形グランドで、更に新しいグランドを作り、試作したりもするものの、やはり、自作のグランドでは、描画した線の一部が欠落してしまう。



先生がお勧めしていた、

『文房堂の液体グランド』を使って、ちゃんとした作品を作りたい。

0077

小さな夢があります。
ハードグランドエッチング、

2003年8月制作
w6×h16cm

傷のある銅板では、

作品がダメになってしまうことにも気付く。

それでも、買うのももつたいたないので、作品が安定するまでは、バリ島から持ち帰った銅板を使うことに決めて、お教室に顔を出す。

人の入れ替わりはあったものの、三年半前にもいらした、優れた版画家の方々も、何人かは、制作を継続されていた。ヨカッタ。



昔作った、バラの作品を、
もう一つ作ってみる。

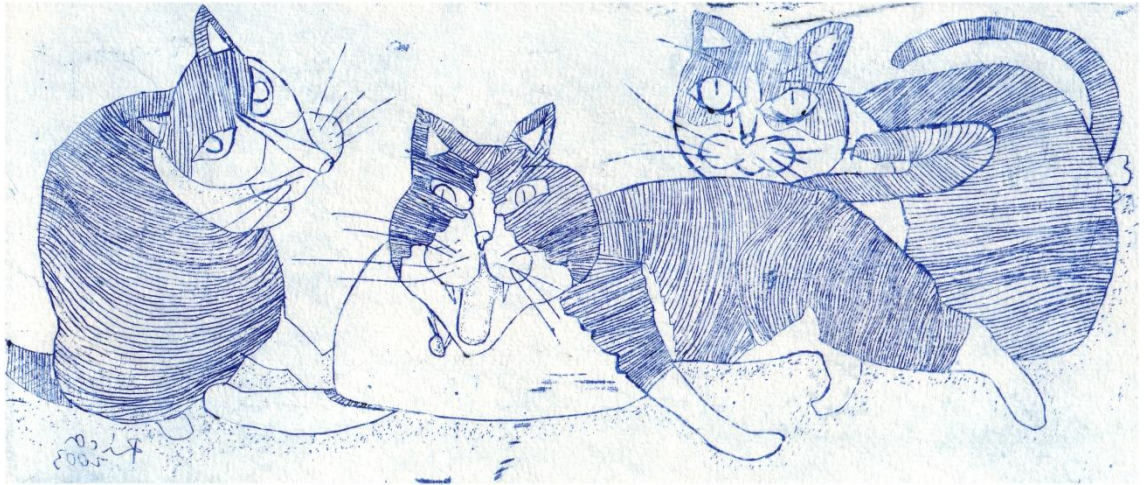
バラの絵は、何度描いても
難しい。花の上に蜂を描いたが、
これは失敗だった。

0078
好きなことをして 生きなくち
ゃ!!
ハードグランドエッチング、

2003年8月制作

こちらにも、銅板の磨きが足りないので、全体に、
ブルーのシミができてしまう。

プレートマークも、腐食により、ガタガタになる。
セロテープで保護するのを忘れていたよ。



久しぶりに制作すると、昔、
当たり前になっていたことを
すっかりと忘れていた。

0079

三匹の猫

ハードグラウンドエッチング、

2003年8月制作

w16×h6cm 文房堂のアートスク
ール生徒さんたちの展覧会に出展

九月に開催される、文房堂の、『アートのスクール
生徒さんたちによる作品展』というのがあり、帰国
早々、私は、それに出展するための作品作りに没頭
した。

銅板に激しく傷がついているが、時間がないので、仕方がない。

『今回は、これで行こう。』

バリ島では、銅版画を休んでいる間に、せっせとスケッチを重ねたせいで、絵はかなりおもしろくなってきた。



バリ島から持ち帰ってきた、ヌードデッサンのスケッチからも、いくつか作ってみる。

気を抜くと、顔が失敗してしまおうし、線も一部欠落してしまおう。

0080

ぐっとくるね、笑顔
ハードグランドエッチング、

2003年8月制作

字も下手糞のままである。

今度は、少し気をつけて作る。



0081
三匹の猫
ハードグラウンドエッチン
グ、

2003年8月制作

文字も、まあまあだし、絵も
ヨカッタと思う。

この作品は、センセイにも、
コントラストがいいと、初めて
褒めて頂いた作品だ。

銅板の曇りがきになるけど、きちんとした銅板で
作れば、かなり、イイ線いくと思う。

今までの作品と、帰国後の作品とで、最も違う所は、腐食液である。



今までは『硝酸』を利用して

腐食していたが、日本では、

『第二塩化鉄』を利用する

ことにする。

0082

ちょっとガマン ちょっとや
せた

ハードグランドエッチング、

2003年8月制作

硝酸や、腐食の時に

起こる化学反応の煙が、人体に相当悪いらしいのだ。

腐食ごときで、体を悪くするワケにはゆかない。

そういう意味では、腐食のデータは、ゼロから取り直しということになる。

私は、また、新しい線を
探さなければならなかった。

この作品は、線の欠落を
無くしたいと考えて、線を
二重になぞってしまう。



二重になぞった線は、太くはなるが、どうにも、
美しくないのである。

心に迷いが出ると、正直に版面に写される。全体
に広がったシミも、肌の部分だけは白くしたい。

0083

元気満タン、ハートオッケーっす
ハードグラウンドエッチング、
2003年8月制作

w11 × h16cm

どんな線も、まだまだという感じである。

この作品は、文字が失敗する。



0084

元気 届けにきた。

ハードグラウンドエッチング、
+アクアチント・スパンコール

2003年8月制作

w6×h8cm

『失敗しないように、失敗しないように』と思っている気持ちで、どうしても、版に写し出されてしまっているのである。

作品を作るにつれて、版が乱れてきてしまう。慣れという油断も、銅板に映し出されてしまうのだ。

自作グラウンドにこだわりすぎていたという問題も大きかったと思う。



0085
おつかれさま。
ハードグラントエッチング、
2003年8月制作
w4.5×h3.5cm

バリから持ち帰ったグラントは、瓶の中で劣化が進んでいたのだろう。そういうことに気付かないで、作品を作り続けていたという、無知もある。



0086
ご機嫌だね、縞模様だね。
ハードグラントエッチング、
2003年8月制作
w8×h13cm

この版は、初めから、版全体にサンドペーパーで傷をつけた版にエッチング。イマイチだぜ。



文字の欠落に悩んでいた私は、インターネットのオークションで、銅版画が安く売り出されているのを見る。

0087
Stretch or Shrink。
ハードグランドエッチング、
2003年8月制作
w20×h12cm

コミック調のイラストが中心の、イギリスの作家『TIM』の作品だったが、額付き五千円で落札できて、手元に置くことにした。

彼の作品も、私の作品と同じように、一度だけの腐食で線を取り、手で彩色するという版画である。

版画には、文字も入っている。

彼に作れて、アタシに作れないはずがない。

彼の作品を手元に置くことで、私の版画のレベルは一気に向上していった。

そんな時期、作田先生に、池田満寿夫展が開催されているとの情報を教えていただき、見に行くことにする。

彼は、日本で一番有名な銅版画家であったにも関わらず、アタシは、三点程しか見た事がなかった。無料だというので行ってみる。

池田満寿夫の作品は、『ブリュッセル』や、『ロートレック』や、『竹久夢二』や、『ミロ』のようには、アタシの心を動かさなかった。

しかし、脳みそは覚えていたようだった。



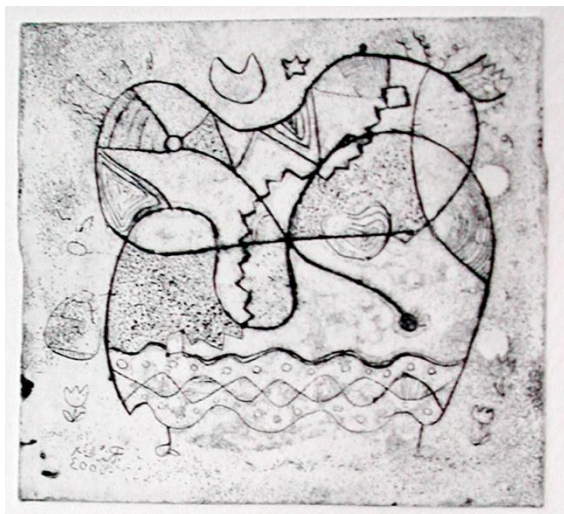
池田満寿夫を見に行った後に
A5のメモ用紙に描いたスケッチ。



その後の作品は、今までの
作品とは違い、線は自由になり、
激しさも、出るようになってゆく。

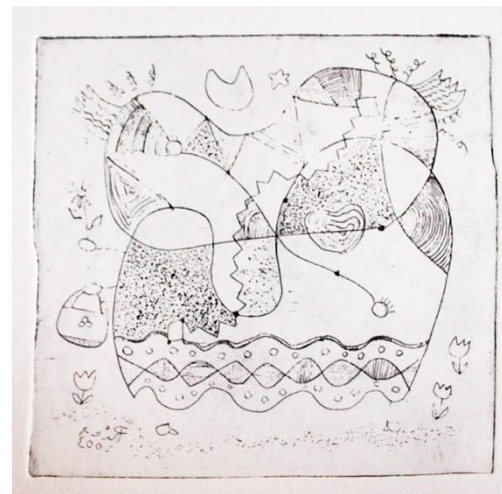
池田満寿夫展で、彼の本を
立ち読みすると、瑛九という
方が、銅版画のセンスイ
だったということを知る。

0088 泡だらけで仏様の極楽
ハードグランドエッチング、
アクアチント
2003年9月制作 w12×h20cm



0089 下北沢の女 →
ハードグラウンドエッチング、
池田満寿夫展を見に行く前

← 池田満寿夫展を見に行った後ア
クアチント、ドライポイントで加筆
2003年9月制作
w14×h14cm



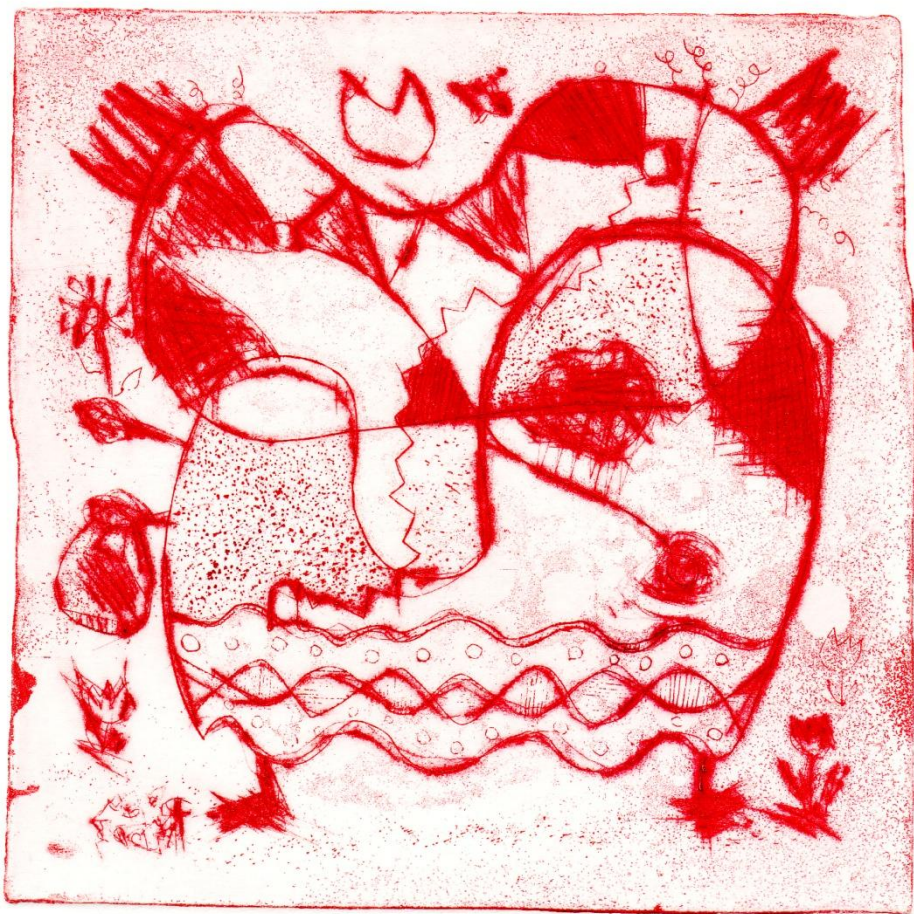
彼は、生前、版画が売れず、
ほとんどの版は、たいして刷
られていなかったのだそうだ。

池田満寿夫が、彼の死後、
ご遺族の許可を得て、瑛九の
版画を刷り増した作品は、安価
に求めることが出来た。

版さえ版画家が作ったもの
なのであれば、版画というのは、
品質にたいした差がないので
ある。

池田満寿夫は、手が届かなか
ったが、瑛九の作品を一枚、
ネットオークションで落札し
てみる。

瑛九の版画は、画面の濃淡
に特徴があった。



0089-2 下北沢の女

ハードグラウンドエッチング、アクアチント、ドライポイントで
加筆

その後、ドリルで加筆。赤インクで印刷

2003年9月制作 w14×h14cm

彼の作品を額に入れて、かなり近い場所に飾った
私は、時々、自分の作品と比較しては、面や濃淡に
も気を配るようになる。

このとき、私は、こんなに作っているのに、銅版
画というのを、ほとんど見たことがないということ
に気付く。

見たことがあるのは、『ブルーゲル』という銅版
画家の作品。

それから、山本容子をテレビ番組で数点。画集で数百点。

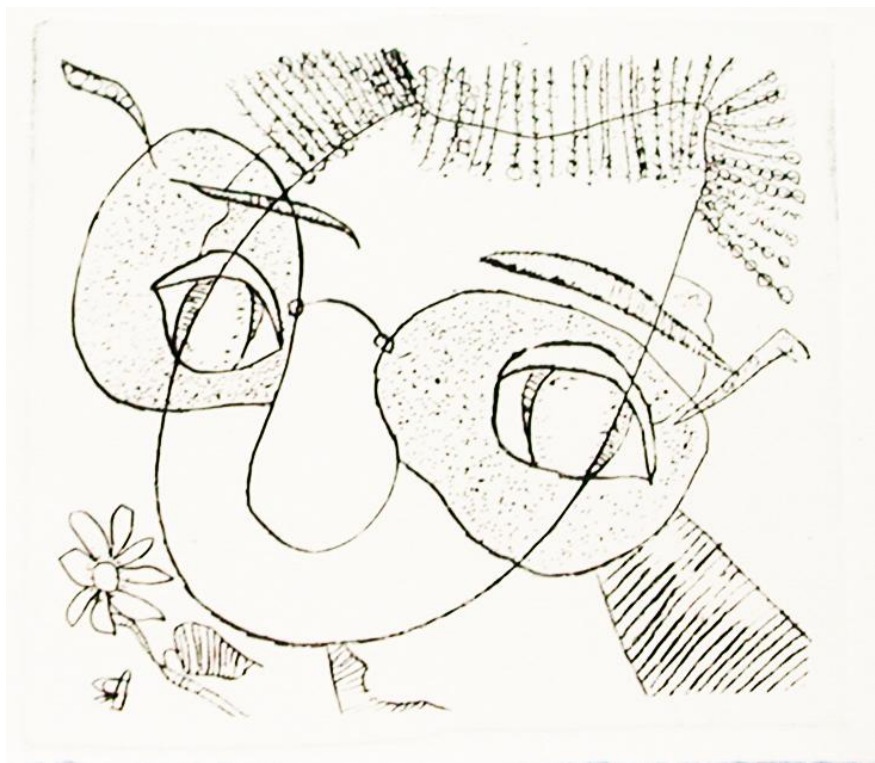
池田満寿夫を何点かしか、あとは、お教室で制作している、生徒さんの作品しか見たことがなかったのである。

売買されている作品を、少し研究しよう。



0090 ぼやけた天使
ハンディタイプのドリルでドライポイント
2003年9月制作
w10×h10 cm

そうして、私は、作品作りの参考にするために、ネットオークションを時々覗きに行ったり、銀座の画廊に足を運んで、実際の作品を間近に見るようになった。



0091 抽象画の男
ハードグラウンドエッチング

2003年9月制作
w12×h12 cm

プロの作品というのは、一体、どれくらいの値段で売買されているのかも調査する。

銅版画は、思いのほか、安いので驚かされる。

売買されている作品を見て、アタシは、自分の作品のレベルをもっと上げなければならぬということを理解する。

オジヤラよ、気付くのが遅すぎるぜ。

『どんな問題点であっても、気がつかないよりは、気付いた方がいいに決まっている。』

気付くことができたなら、方向を修正して、また、先に進むことができるのだ。気付くことができなかったら、方向を修正することすらできない。

そんな折、私が参加している、ダイレクトマーケティングの勉強会が、二十周年を迎えることになり、記念品を探しているという話になる。

私の銅版画を、記念品にしたらどうかという、暖かいご好意を頂く。

作品のレベルは、売買可能なところまで、『あと、もう少しかなあ』という気はするのだが、まだ、自信がないという段階だった。

あと二十版位、習作を作り、自分なりの線というのを完成させたいという矢先の事だった。

それでも、百二十枚というのは、刷りや、色塗りの練習にもなるし、金銭的にも、ありがたい金額で、『私なりに、精一杯やらせていただきます。』ということで、注文を頂くことに決める。



0092 DMW20th 記念品 (Customer's Desire)
ハードグランドエッチング+手彩色
2003年10月制作 w9×h14 cm

百二十枚もの版画を、一版で作れるのかも、試したことがなかった私は、三十枚づつ、四版作ること
に決める。

銅板は、市販の、傷の無い品を買い、下絵も何枚も描いて、制作に取りかかった。

カラーインクは、後から手彩色することも考え、色は、黒で印刷することにする。

版画は、下絵ほど簡単には、完成しなかった。さりげない、この版でも、実は三枚も版を作り直している。



0093 DMW20th 記念品

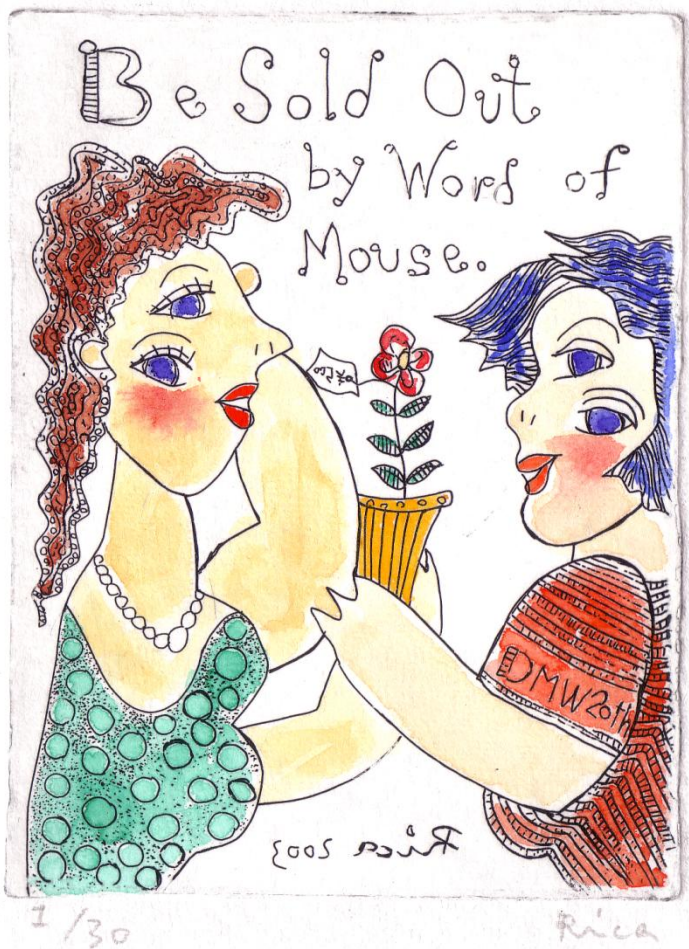
(Lose 2kg, Feel myself young again.)

ハードグラウンドエッチング+手彩色

2003年10月制作 w9×h14 cm

作品でお金を頂くというのは、簡単ではないと、身が引き締まる。

四版作ることにしたことで、一番問題になったのが、版の完成度に差が出てしまったことである。一版一版は、悪くないのであるが、並ぶと、良いのと悪いのとの差が歴然なのだ。



0094 DMW20th 記念品
(Be Sold Out by Word of Mouse)
ハードグランドエッチング+手彩色
2003年10月制作 w9×h14 cm

特に、この版の出来がヨカッタので、この版のレベルまで、他の作品を作り直さなければならなかった。

作品が、まだ安定していないので、版の完成度が変わってしまうのは、仕方がないのである。まだまだだ。

いい勉強をさせて頂いた。
百二十枚なんて、一度も刷ったことがない数字だった。



0095 DMW20th 記念品
(Hon-Mono is so Different! So Good!.)
ハードグラウンドエッチング+手彩色
2003年10月制作 w9×h14 cm

A5サイズの小さいプレス機で、よく頑張ったと思う。プレス機の性能を考えると、本当は、お引き受けするべきじゃなかったんじゃないかとも思えてくる。

小さな、まるで玩具のようなプレス機なのである。

この四点の作品は、この時の私の技術では、精一杯の作品だったと思う。

私は、銅版画をはじめて販売することができた。知人のご好意というのは、本当にありがたい。

この時の感謝を忘れないように、四枚をセットにして額に入れ、アトリエに飾られている。

銅版画が売れたお金を貯めて、その収益で大きいプレス機を買おうと、もうずっと前から決めていた。

お陰様で、二〇〇三年の十二月に、新しいプレス機が到着する。

こんな稚拙な版画であっても、続けていたお陰で、小さな夢が、実現したのである。

アトリエで、注文の品の制作をするのと平行して、
銅版画のお教室では、新しい技法を教えてください
た。



0096

砂糖の女（シュガーチントの習作）

リフトグラウンドエッチング

2003年10月-12月制作

w15×h22 cm

↑腐食三回目

←腐食六回目（+コピートナー）

リフトグラウンドエッチングという方法で、

筆で描いたような線を、銅板に描き出す技法である。

もともと、絵手紙のような線を作りたいと思い、
ディープエッチングに進んできた私だが、この、リ
フトグラウンドエッチングは、私の作品に、とても合
っていると思う。

まだ、何枚かしか作っていないが、今後は、リ
フトグラウンドエッチングが、私の作品作りの主流に
なってゆくと感じている。

理由は、筆で描いた柔らかい線を重ねて、ゆき、
他の人とは違う、独自の作品を作り上げることが可
能じゃないかと、ちよつと期待しているからである。

個性の無い作品は、売れることが無い。



0097

砂糖と松脂の女（シュガーチントの習作）
リフトグラウンドエッチング+アクアチン
ト

2003年10月-12月制作

w15×h22 cm

バリ島から持ち帰った、粗悪な銅板が、まだ沢山あることもあり、私は、新しい技法にもチャレンジするようになった。

銅版画というのは、凹の溝の部分にインクが入れられれば、どんな方法で凹を作っても構わないのである。



0098 ミイラ
ビニールテープを細く裂き、銅板
に巻いて腐食を三回繰り返す。
2003年12月制作
w3×h4 cm

リフトグラウンドエッチングの後は、銅板に紐を巻き、直接腐食を繰り返した作品のシリーズや、先生が、時々使われる、コピートナーを使った作品などのチャレンジをスタートする。

新しい技法を習得するのは楽しい。

イロイロな品物を使って、凹を作ることで、個性的な作品が完成するということに、気付いた私は頭の中は、どうやって『溝』を作るのかということ、で、イツパイである。



0099 コピートナーのピノキオ（習作）
コピートナーによる描画・単純腐食
（中央部は、作田先生が描画。残りの部分は、
オジャラによる描画）
2003年12月制作 w12×h12 cm

銀座の画廊を巡っている折り、『牛玖健治』さんという方の作品に目が止まる。A4程度の紙に、赤いインクで刷られた、エッチングで、お値段は八千円だった。

『うひょー。こんなに素晴らしい作品なのに、こんなに安いのか。』
それにしたって、驚くぜ。

彼の作品は、もしかしたら、『硝酸』を使っているのかもしれない。丸みを帯びた、美しいラインには、暖かさと、緊張感がある。



0100 ルーレットのチューリップ (習作)
ドライポイント (ルーレット・ニードル)
2003年12月制作
w12×h12 cm

描画には、かすれも迷いもなく、同じ太さで仕上がっている。

『これがプロの作品だよなあ。』と、脳みそが『ガーン』と鳴る。



0101 ルーレットの猫
ドライポイント（ルーレット）
アクアチント・スパンコール
2003年12月制作 w12×h12 cm

そうして、思い出す度に、あの、美しい赤色の、
潔く拭きあげられた版画は、高い技術に支えられた
作品だと思わされる。

彼の作品は、三枚拝見したが、A3程度の、かな
り大きい版の作品でも、一枚三万円であり、どれも
安価に販売されていた。

値段を高くしすぎないというのは、作家さんの、方針なのかもしれない。

版画は、複数作れる分、身近に飾れるアートでなければならぬし、沢山の方に親しんでいただけることこそが、芸術家の喜びだからである。



0102 麻糸のミイラ
麻糸を銅板に巻いて、直接腐食を三回繰り返す
2003年12月制作
w3.5 × h5.5 cm 赤紫のインクに黄色で凸刷り

私の版画が、赤インク中心になってきたのは、彼の作品を見た後からである。単細胞。

最近、益々、赤いインクに凝っている。

赤いインクは、粘度が柔らかく、刷るのが難しい。

私の版画のように、腐食が深いと、更に刷るのが難しい。



赤インクでちゃんと刷れば、他の色の場合、もつとちゃんと、刷れるということなのだ。

銅版画というのは、描画したときには、良い作品に思えても、印刷すると、反転するので、絵が、イマイチになってしまうこともある。

0103 Be in Bloom
ハードグランドエッチング
2003年12月制作
w12×h20 cm



今まで、自作のグラウンドや、

市販のグラウンドを使って、

試作を繰り返してきたが、

線が一部欠落してしまうのは、

描画する力が弱いせいだということにも気付いてきた。

0104 華やいでる?
ハードグラウンドエッチング
2003年12月制作
w6×h20 cm

グラウンドを塗った上に、ニードルで描画するのだが、ニードルが、細すぎる上に、力にムラがあり、線に反映してしまうように思えてきた。

お教室のセンパイの作品を見ると、シツカリと描かれていて、線の欠落などは見当たらない。

センパイに出来て、アタシに出来ないというのは、アタシの技術が不足しているからということである。センパイが使っているニードルと同じのを買って



みる。(常に真似してみるのがアタシ流)

線を慎重に描画する。

今度はどうだっ。

欠落はなくなったが、新しい

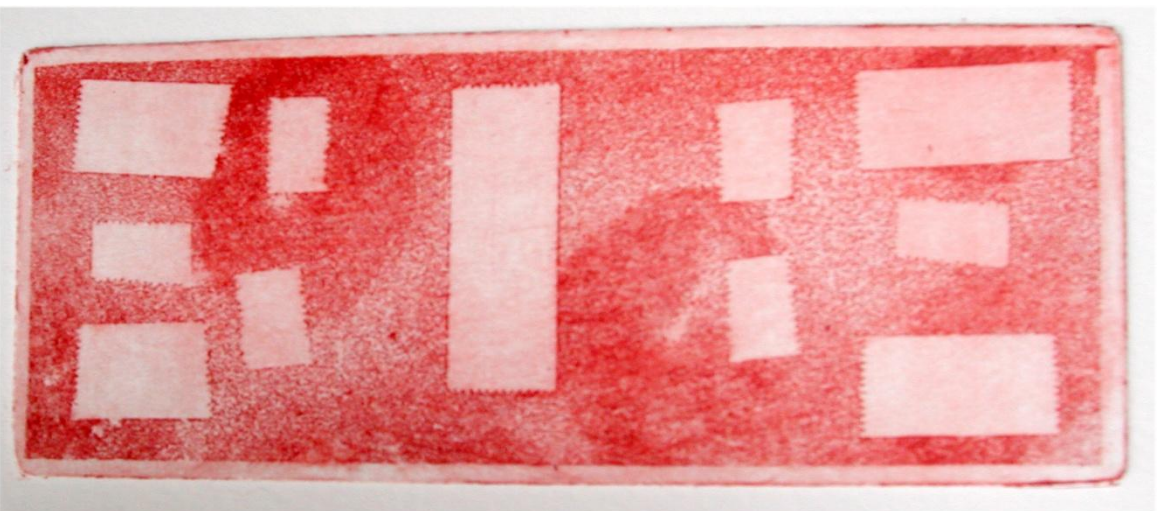
ニードルは、キリみたいな形で

描画が難しかった。練習せねば。

0105 見つけた
ハードグランドエッチ
ング
2003年12月制作
w9×h19 cm

毎回、線が勝負のエッチングには、緊張や迷いが走る。

もつともつと、絵を沢山描いて、描画がサラサラいくようにならないとイカンなあ。



0106
マツヤニとセロテープの抽象画
アクアチント
2003年12月制作
w20×h10 cm

新しいプレス機が届いたので、もうそろそろ、大きい銅板も買おうと思っている。

今まで小さい作品しか作ってこなかったの、大きい版に慣れるまでには、少し時間がかかると思う。

大きい版で作るということは、銅板は高いし、紙代もかさむ。インクも大量に必要になってくる。



0107 お菓子のリボンと麻糸のミイラ(習作)
お菓子の紙の紐、麻糸を銅板に巻いて、直接腐食を三回
2003年12月制作
w10×h10 cm 赤紫のインクに黄色で凸刷り

うーむ。続けられるのかしらん？（金的に）
それでも、最低でも、牛久健治さんと同じ大きさ
の作品を作らなければならぬ。
それでやっと、一枚8千円という土俵に乗れるの
だ。

銀座の画廊を見て歩いたときに、偶然、銅版画と木版画をあわせた作品を作る方の個展を拝見した。



0108 チューリップと雪（習作）
リフトグラウンドエッチング（一部アクアチント）
2003年12月制作
w12.5×h12 cm

池田さんという女性で、もう、何度も個展を開かれている方だった。

木版と銅版画を使った版画で、柔らかいタッチと、銅版画の強い線がアクセントになっている作品は、何色かの多色刷りをされていて、個性があった。

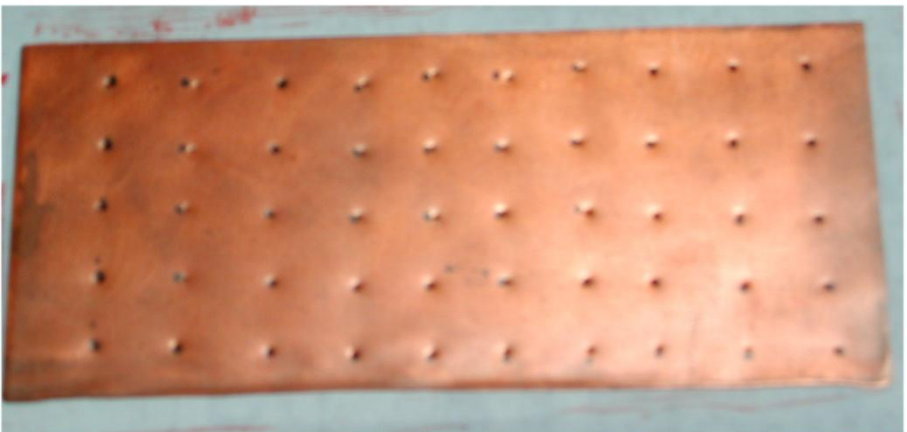
彼女の作品は、多色刷りで、しかも、牛玖さんのより大きかったのに、お値段は一万円以下から売られていたのが、また驚きだった。版のサイズはA4からB4程度が主流。

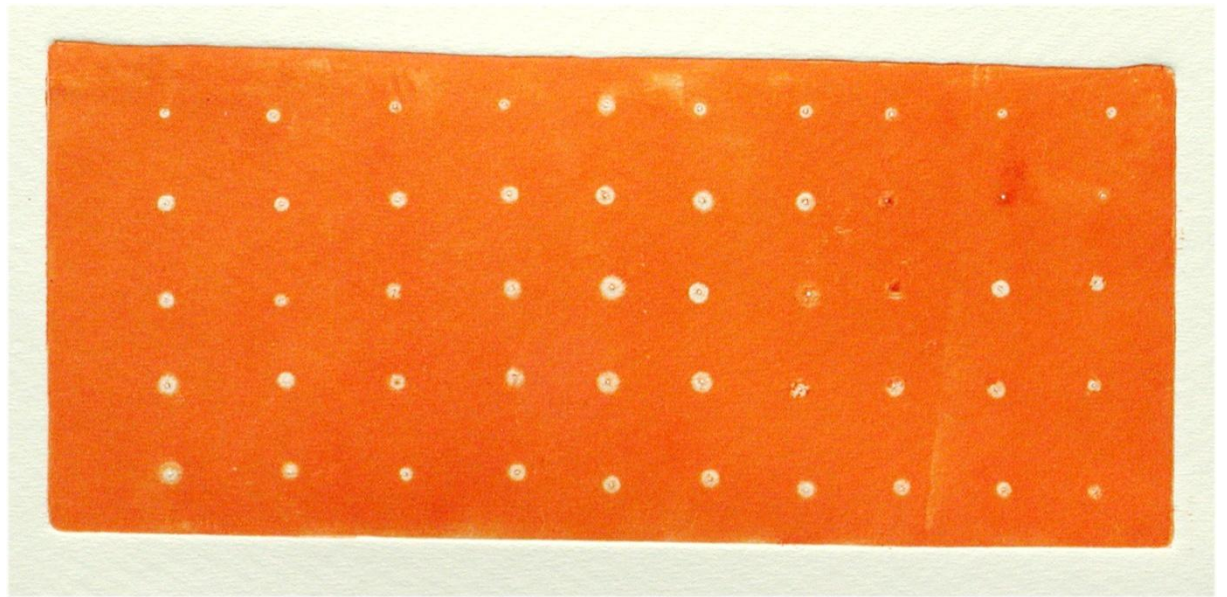
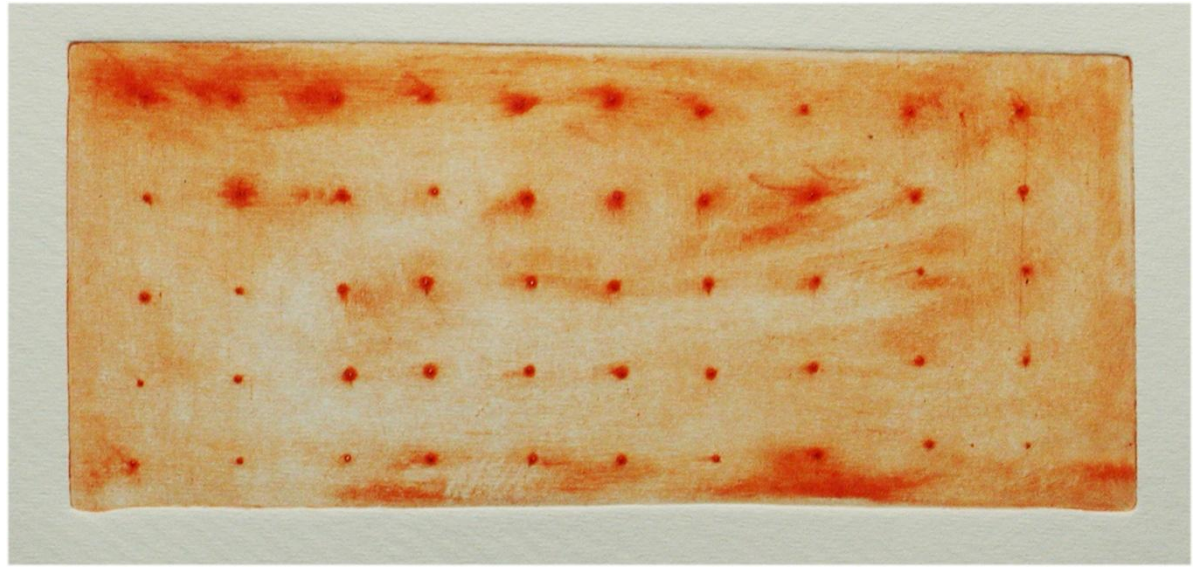
どこぞで売られている、六十万円とか、百万円とかいう版画は、一体何なんだろう。

池田さんの数年前の作品には、釘を使った銅版画の作品もあった。

池田さんは、初対面の私に、釘の技法を丁寧に教えてくださった。芸術家なのに、いい人だぜ。ついでに、刷り方も聞いとけばヨカッタよ。

そんで、傷のある銅板で、トンカチと釘の点描の作品を試作してみる。





マジックで当たりをつけて、そこに、
釘を垂直に打ち込むだけ
である。『これ、刷れるのかなあ？
ローラーでインク詰める
のかなあ？アクアチントって
ことは無いと思うけどなあ…。』

0109 釘のドット (習作)

ドライポイント (釘とトンカチで点描
画)

2003年12月制作

w8×h18 cm

上 普通に印刷

下 ローラーで凸刷り

そんなことを考えながら、他の版画と合わせてみても面白いかなあと考えたり、自分でカットしているので、サイズが合わないから、多版刷りはダメだろうなどと自問自答を繰り返す。

アトリエにはパソコンも電話もないし、誰も来ないので、いつも一人きりの空間なのである。

釘の作品に熱中している頃、自宅の本棚から、初期の版画たちが、そつくとり出てくる。

バリ島に行く前に、自宅で作った初期の作品だ。懐かしいぜ。

高いインクで作っていたせいもあり、光を遮断して保管していたこともあり、昔のままの状態を保っていた。

この版画たちを入れると、もうそろそろ、百版かあ。

『この辺りで、画集にしておこうかなあ。』

自分で作れると便利だぜ。

銅版画のインクは退色しない。五百年前の版画であつても、保存の状態がよければ、当時のままで展示されているのである。(注：手彩色の透明水彩絵の具の方は、色褪せします。間違いなく。)

デジタル画像や、印刷物と、ホンモノの作品との間には、圧倒的な差がある。

私の場合、その差がキチンと理解できており、作家として受け入れられているので、インターネットで、作品の配布が行えるのである。

どっちにしたって、アタシは、まだ、賞も取っていないし、画壇にも入っていないので、そんな人の作品、専門家には、全く相手にされないもんなのよ。

電子画集という形に残してゆくことで、気付いてくれる人は圧倒的に増える。

アタシは、インターネットで勝負に出るぜ。

二〇〇三年は、絵を描けない時期もあり、画集を作れなかった。

『大昔の写真集』やら、『自分のへボな俳句集』なんかを作っている場合じゃないだろう。ったく。

自分の画集を自分の記録の為に作ろう。

電子本のタイトルを、

『DEEP EDGE』に決める。

何時間も腐食した、『深い溝』の銅版画。

アタシの版画の特徴だからである。

どんな表紙にするのか、版のデザインを考えていると、机の上には、昨日作ったドットの商品と、トンカチと釘がある。

グラウンドを塗るのが面倒だったアタシは、表紙も、釘を使った『池田式』で描画してみようと思える。

作りながら、『これって印刷できるのかなあ……。』と、かなり不安にもなる。

ま、いいか。『釘の点で描かれた銅板の写真』でも、銅版画の画集の表紙になるしなあ。

そうして、釘で打ち込んだだけの版は、あつという間に完成する。

これもアリだよなあ。やっぱ、ドライポイントになるのかなあ。そうだよなあ。うん。

念のため、一枚だけ刷ってみることにする。
おおっ。刷れるのか。



0110 DEEP EDGE
ドライポイント（釘とトンカチで描画）
2003年12月制作
w12×h12 cm

なんかオールド アメリカン風ぢやない。

『お客さん、お部屋のインテリアにどうっすか？』
たははは。

近くで見ると、この釘のところに入ったインクが
ピヨコンと盛り上がってカワイイぜ。

デジタル画像では、凹凸までは表現できないのが物足りない。

そうして、二〇〇三年にまでに作られた、私の全銅版画集も、いよいよ完成となる。

たいした作品集ではないが、無いよりはマシである。

ご覧になった方で、気に入った作品があれば、プリントアウトして、パソコンの横とか、トイレとか、冷蔵庫なんかにはヨロリと貼り付けてみてください。

気持ちを切り替えたり、リラックスしたり、何か、目標に向かって進んだり、そんなときに、ピッタリくる作品がきつとあると信じています。

次回の画集は、もっと充実する予定。お楽しみに。

おまけ…Ⅰ

二〇〇三年最後に作ったのは、この、メゾチント
の作品。



メゾチントというのは、説明する

のが面倒なんで、省略っす。

オジヤラは、『メゾチント版画』

を作るのは生まれて初めてっす。

0111 恋
アルミメゾチント版利用
2003年12月制作
w13×h15 cm

この先も、作るかどうかは、未定です。

リトグラフの講習会の際に、センセイから、『私は作りませんので、どうぞ』と言っていた。ただいたメゾチントのアルミ版が、机の上にあって、たまには作ってみるか、思い立って作ったのがこの作品です。

そういう意味では、銅版画でもなければ、エッチングでもないんですけど、二〇〇三年作成ということで、まとめて収録します。

肩が凝るから、次回作があるかどうかは未定です。貴重だわあ。

メゾチントって、何枚位刷れるんだろう。ニツケルメツキってできるんだろうか……。謎が多いぜ。

おまけ……

年末、掃除をしていたら、不要なCD・ROMが大量に出てしまう。

最近お教室では、プラスチックの板に描く、ドレイポイントというのが流行っている。

何故流行っているのかといえば、銅板よりも、プラスチックの板の方が安いからである。

そういえば、作田先生が、ミニプリント点の作品に、CD・ROMに描かれたのがあるとかお話されていたよなあ。

『ちよつくら作ってみるか。』

と、愛用のドリルを取り出して、一枚作ってみる。ルーレットも使って、グレーな面も作る。

本当に刷れるのか？



0112 猫
CD-ROMの裏側にドライポイント
ト
2004年1月制作
w11.5×h11.5 cm

おおっ。円形も、中の穴もバッチシと表現されていて面白い。

CDケースに収納すれば、そのままインテリアに。
(安)

でもまあ、版画って、これくらい、気軽でいいとアタシは思っている。

ここまで深い色を出すには、やはり、電動ドリルが無いと、手で描画するだけではムリかもしれないし、プレス機がないと、こんなにクツキリとは、印刷できないかもしれないっすけど、まあ、不要なCD・ROMがあつたら、ドライバーなんかで、傷をつけて、バレンで刷ってみてください。

気軽に、アートを楽しんでくださる方が増えると、アタシもウレシイっす。

おまけ…III

画材のカタログに、子供用版画用品として、『発砲スチロール板』というのが販売されているのを発見する。『版が柔らかいので、低学年なんかでも、気軽に版画が楽しめる』などと書いてある。おおっ。子供用の版なのかあ…。

オジヤラは、銅版画のインクや油絵の具を乗せるパレットに、肉用の、発砲スチロールのトレイというのを使っているのだが、先日、表面にビニールが貼ってあるトレイというのがあることに気付く。

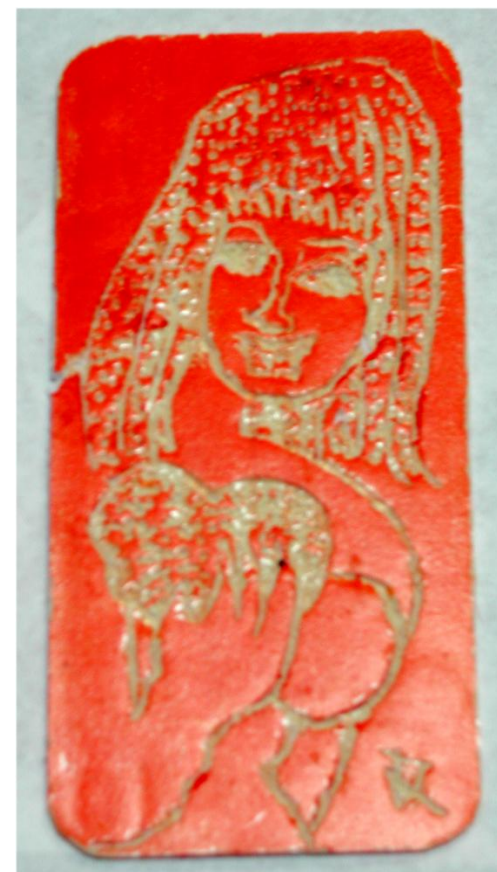
発砲スチロールでの版画に、前からチャレンジしてみようと思っていたこともあり、ビニールコーティングされたトレイの平らな部分を見て、『このツルツル感があれば、印刷できるかもしれない。』

と思いつき、ニードルで描画して、ローラーでインクを乗せてみる。

そうして、圧を軽めに調整しながら、ちよつと印刷してみる。

デザインをもう少し考えれば、これもアリだよなあ。

この版は、あまり丈夫じゃないんで、使い捨てつて感じで、何枚かしか印刷できないのだが、廃材利用なので、原材料のコストはとて安く済む。



0113 発砲スチロールの女
肉用トレイの平らな部分に
ドライポイント 凸刷り
2004年1月制作
w11.5×h11.5 cm

すぐに凸凹が作れるので、小さいお子さんと、一緒に遊んだりするのに、気軽にいいと思う。

また、凸刷りは、凹刷りと違い、バレンでカンタンに印刷できるので、年賀状とか、ちよろりとチラシなんかを作りたいときとか、多版刷りの色の部分なんかにも使えると思う。

この作品を見て、版面を気軽にはじめてみようという方が増えるといいと思う。

CD-ROMの作品によくしたアタシは、今回の電子画集のCD-ROM版のラベルも、CDに直接描画した写真を使うことにする。

CDのラベルを作る作業というのは、思いのほか時間がかかるからである。



これらの『おまけ』の作品が、

114 DEEP EDGE
(CDラベル)

CD-ROMの裏側にドライポイント

2004年1月制作

w11.5×h11.5 cm

次回の画集のトップに来るといのは、やはり問題があるような気がして、今回分に収録することにする。

終わりに

読んでくださって、稚拙な版画を見ていただいて、ありがとうございます。感謝します。

この版画集は、ある程度高解像度で作成してあります。

プリンタをお持ちの方は、どうか、気に入った作品をプリントアウトして、版画の部分を切り取って、身近な所に飾ってみてください。

作品によっては、プリントがイマイチなものもあると思いますけど、自分で撮影して、画像加工もしているのです、その辺、ご容赦下さい。

飾れる程度にまで、背景の色を白く抜いてしまうと、版画っぽくなくなってしまう作品も多く、ぼんやりと、紙の模様とか、プレートマークなんかが残るように加工してあります。

銅版画を作り始めて、イロイロな方に作品を見ていただきましたが、ほとんどの方が、『この言葉が好きだから』という理由で、版画の好き嫌いを決めていきます。

『まだ絵が下手だから、絵では選べない』ということもありますけど、この、版画に込められたメッセージというのが、見る方に、直接働きかけているのだと思わされます。

見るたびに、元気が出たり、夢に向かって進めたり、自分の気持ちを切り替えたり、リフレッシュできたり。気軽に飾っていただけ、そんな作品が作れるようになれるといいなと思います。

東京にお住まいの方、千住方面に来られる用事のある方は、ぜひ、実物をご覧になってみてください。『おじゃら現代美術館 & 画廊』は、北千住駅西口徒歩四分程度です。メールを頂ければ、地図をお送りします。

見返すと、画集にするほどの作品でもありませんが、電子本は、タダで作れるもんで、銅版画百版を記念して、初期の作品から画集にまとめてみました。本作りというのも、思いのほか楽しいです。美術館には、この本をプリントした品と、銅版画の実物も展示されています。

次回は、もつと、イケてる作品集になる予定です。お楽しみに。

二〇〇四年 一月 おじやら りか

追記 アクロバットリーダーが進化したため、旧作の作品が閲覧できなくなりましたので、二〇十四年に、不具合を修正し再配布しています。当時の書体や色などが再現できずに残念ですが、低予算なので仕方ありません。最後まで読んでくださってありがとうございました。

プロフィール

なんていう、だいそれたものはありません。

サラリーマンを十年やって、その後、三年半、バリ島に在住し、二〇〇三年の五月に帰国しました。



どうですか？この、ピカピカに磨き上げた銅板。

こうやって、作品を積み重ねていくとね、たまには、見れるのも出来たりするって感じかなあ。

そのうちになんとかなるだろう。うふふ。

電子画集の制作について

アタシのすごい所は、電子画集を自分で作ってしまふところである。

自分で作って、自分で出版して、自分で販売する、『自前出版』である。

沢山の人に、作品を見ていただきたいというところからスタートした、電子画集作り。
本を作るのは、思いのほか楽しい。

インターネットで知り合いになった方で、俳句や文章を書く方の多くは『本を出したい』と思っっている事を知る。

写真をやっている人は、写真集を、アーティストなら、自分の作品の画集を、みんな出したいと思っているのである。

特に、画像を大量に扱う作品集は、制作コストがとても高くて、貧乏な芸術家には、手が出ない。

コストが何百倍も違うのであれば、とりあえず、電子本で試してみるのも悪くない。

画像加工の知識と、パソコンがあれば、自分で作品集を作れる時代になったのである。

電子本の良い所は、『紙に印刷しない』から、『高い印刷機を動かすコスト』がかからないので安いというところである。

私が作っている画集は、気に入った作品を、読者が、自分のプリンタで印刷できるといふ作品集である。

(自分で作った場合) 在庫管理も制作コストも全くかからないのに、自分の知名度を上げられるというのであれば、作らないという選択肢はない。

好感度というのは、頻度と比例して向上するのである。印刷して作品を飾って、毎日作品を見ているうちに、実物が欲しいと言ってくる方もいらっしゃるかもしれない。

どんな展覧会に行っても、ポストカードやポスターを記念に買ってきては、チョコっと飾っていた私の部屋は、複製画で溢れていた。

会社のデスクや、粗末な家に飾るのだから、複製画で十分なのだ。

モチロン本物は欲しいけど、百万円ですとか、五億円ですと言われるても、買えないぜ。

ホンモノはお高くて、金銭的にムリだから、複製画を飾って、とりあえず、満足しておく。という庶民は圧倒的に多い。

アタシもそうだったし、少し金が稼げるようになってから、やっと『ホンモノ』を何点か買ったという実績しかない。

『複製画』↓『安い版画など』↓『油絵の小さい作品』などという風に流れていくのが普通みたいである。

何故、お高い品に流れてゆくのかというと、ホンモノのアートは、版画であっても、想像以上にイイということに気付いて、『油絵なら、もっとイイかもしれない』などと思い立ち、もう少し金も出して、もっとイイ気分になろうということのようである。

電子本にして配布すると、自分の作品を、読者様が勝手に印刷して、勝手に飾ってくれるのだ。

こちらでは、お金は全くかからない。

実際にプリントアウトして、飾ってくださった方の中から、実物を買いたいという方も出てきている。

ホンモノは強いのだ。

そんなことなら、自分で、ポストカードなんかを作って売れば儲かると、アナタは思うかもしれない。

キャラクターグッズなんかを作って販売している人を見かけるけど、ほとんどは赤字のはずである。

有名人で無い限り、個人のグッズなど、売れたりはしないという現実を知らないだけなのだ。

実際には、膨大な制作費やデザイン料なんかをイベント会社に支払って、在庫の山が部屋を狭めているという実態も少なくない。

物販というのは、芸術家肌の素人が考えるほどカシタンなものではない。

それは、本の販売であつても同じ事である。

共同出版などといい、金を何百万円も支払つたのに、作った本はたった十冊しか自分の手元に残らないというのは、悪質な詐欺かとも思えてくる。

自費出版をしても、『返品率百パーセント』などという話を聞くと、出版社は、一体何をしているんだろうと、信じられない気持ちでイツパイになる。

しかも、大将、『本になってみないと、何が売れるのか解らない』などと、真顔でおっしゃるから怖い。

プロであつてもそうなのだ。

素人のアナタの本が世にでる可能性は低い。

ところが、電子本であれば、安価にスタートできるので、売れなかつたからといって、(懐が傷まないから)そんなにアタマに来たりはしないだろう。

自分が、文や芸術作品で、将来やっていけるのかどうかの感触を掴むこともできる。

アタシは、買ってくださった方に、感想もお願いしているが、ほとんどの方が、感想を送ってくださるのにも驚かされる。

お客様と、自分との距離が、とても近いのである。

アーティストの貴方は、電子本の、画像は、紙に印刷したモノよりも、品質が落ちるんじゃないかと、不安になっているかもしれない。

ホンモノと、デジタル画像の間には、当然に差がある。デジタル画像は、ホンモノと比較して、著しく劣化している。

しかしながら、『印刷物と、デジタル画像には差は無い。』これが、アタシの結論である。

それは、紙に印刷された作品であっても、パソコン・データであっても『同等に劣化』しているということなのだ。

現代の印刷技術は、デジタル化した、映像を、大きい印刷機にかけて、紙に印刷するという工程で進むので、印刷物の全てのアートは、まず、デジタル画像になるということである。

『紙に印刷された画集であっても、デジタル化されることによって劣化している』 Ⅱ 『デジタルと同じ』ということになる。

紙に印刷して手に持って見るのか、パソコンで見るとかの違いだけなのだ。

優れたアートの多くは、写真映りもいい。

パソコンは、バックライトなので、紙に印刷するよりも、透明感や明度を高く設定でき、実物よりも美しく再現できる場合すらある。

元が同じなのであれば、安く作れることに、より価値がある。

自分で作る電子本であれば、写真の点数やページ数などに制限はない。好きな絵を好きなようにレイアウトして、好きなフォントを使って、何点でも掲載できる。

自分の思い入れとか、製作の苦労やエピソード、お世話になった方への感謝の言葉。

そんなのを好きなように盛り込んで、自分の集大成としてまとめることができるのである。

話がつまらないから、書き直してくれとか、売るために、ウソばかり書き足したり、そんな、歪められた本とは違う。

アーティストが、画集を何故作るのかといえば、画家が、自分の作品や制作の姿勢を、収集家や専門家にまとめてみてもらうためのきっかけ作りに過ぎない。

どんな無名作家の画集であっても、新しい作品であれば、見たいと考える専門家や収集家がほとんどだろう。

その情熱は、専門家の不得手なパソコンをも開かせる。

逆に、どんなに優れた作品を作れても、賞を取ったり、本などの文献に載ることがなければ、その存在を知られるということはない。

芸術活動には、自分の作品の知名度を上げる活動も含まれる。

それは、ホームページを持ったり、画壇に入ったり、公募展に入賞したりするということである。

画集を作るとするのは、それと、同じ活動なのである。

ホームページを持っているから、画集は要らないと考える人もいるかもしれない。

画集とホームページの一番の違いは、画像の品質である。

ホームページでは、画像は、自動的に圧縮されすぎてしまうのだ。電子本であれば、高解像度のデジタルカメラの画像程度で、本にまとめあげ、表示・プリントすることができるとは、

高解像度での作品の再現は、全てのアーティストの要望なのである。

電子本は、ホームページよりも、圧倒的に美しい作品の写真の状態で、まとめあげることができる上に、改ざんされにくいという特徴を備えている。

もし、ある程度の解像度で本が作られているのであれば、専門家や収集家は、気になった作品は、必ず印刷してみる。

そうして、その出来がよければ、実物も見てみたいと思うはずなのだ。

バックライトの効果もあり、紙に印刷するよりも、アナタの作品がぐっと輝く場合も多い。

デジタルの個性を理解すれば、今よりも 一歩踏み込んだ形で、画廊や出版社、収集家、美術館などにアプローチすることができるのだ。

画集は、実物を見てもらう為の糸口に過ぎない。

私の画集は、作品集のレベルとしては、かなり下だと解ってはいるが、ポピュラーなソフトで作者がカンタンに作れる上に、ダウンロードした読者様が、作品を、印刷して飾れる電子画集のサンプルという意味では新しい。

有能なアーティストが、自分で画集も作り、自らチャンスを掴む日が近づいていると信じている。

おじやら・ねっとの本



電子銅版画集『DEEP EDGE』

ネット配信版 フリー

CD-ROM版 七百元

発行 二〇〇四年一月

銅版画と文 おじやら りか

発行者 おじやら りか

発行所 あとりえ おじやら

〒一〇〇・〇〇二四

東京都足立区千住三・五十八

[E-Mail:rica@ojara.net](mailto:rica@ojara.net)

<http://www.ojara.net>

ISBN4-901941-14-3 C-0871¥0700E

© おじやら りか

お気づきの個所がございましたら、二面倒様でも、E-mailにてお知らせください。

よろしくお願い致します。

おじやら・ねつとの他の本

CD-ROM版『おじやらの壺』

価格 三千元



*** 収録作品 ***

電子画集『素描』

エッセイ『バリ島★ぶうげんびりあ』

バティックで作る服 (HTML版)

電子本、『自前出版』してみませんか？

電子俳句集『あとりにて』

電子旅行記『日付のある写真集』

電子俳句集『おじやらの吹寄せ投句集』

電子銅版画集『DEEP EDGE』

電子画集『バス停はこちらでございます』

女性アーティストバリ島、セニワタイムンバーによる、初のグループ展

*** おまけ ***

召ませブックカバー

おじやらのプロモーションビデオ

昔の RICAS BAR

おじやら執筆・編集の本が全部収録されています。



ISBN4-901941-14-3 C0871 ¥0700E